

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第53集

と ん ぼ 遺 跡
蜻 蛉

辰井川河道改修関係埋蔵文化財報告

1985

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

草加市は、しばしば豪雨に伴う浸水被害にみまわれ、従来その対策事業の必要性が説かれて参りました。昭和56年10月、関東地方を襲った台風24号による水害を契機として、激甚災害対策特別緊急事業が採択され、辰井堀を辰井川として河道改修工事を実施することとなりました。

この河道改修工事にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、埼玉県教育委員会と埼玉県土木部とで協議を重ねた結果、やむなく発掘調査によって記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査・整理作業は、埼玉県土木部河川課の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施致しました。

本書はその報告書であります。発掘調査から報告書刊行に至るまで種々の御協力を頂いた埼玉県土木部河川課、埼玉県中川・綾瀬川総合治水事務所、草加市教育委員会及び地元関係者の方々、整理作業関係者の方々に深く感謝致します。

また、本書が教育・文化・学術研究の資料として広く活用されるよう希望致します。

昭和60年 9 月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例 言

1. 本書は、辰井川河道改修工事にかかる、埼玉県草加市谷塚仲町字蜻蛉156番地他に所在する、蜻蛉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、埼玉県教育局文化財保護課の調整を経て、埼玉県土木部河川課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施をした。
3. 調査は三次に亘って実施された。第1次は昭和59年1月4日より同年3月31日まで、第2次は昭和59年4月2日より同年10月15日まで、第3次は同年12月15日より昭和60年3月31日まで調査され、第1次を利根川章彦、西井幸雄が、第2次を酒井清治、高崎光司、西井幸雄が、第3次を酒井清治、鈴木孝之が担当した。整理・報告書作成も引き続き財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託し、昭和60年4月1日から同年9月30日に亘って実施をした。
4. 出土品の整理及び図の作成は鈴木孝之が担当し、小林美子の協力があつた。
5. 発掘調査時における写真は、利根川、西井、酒井、高崎、鈴木が、遺物写真は鈴木が撮影した。
6. 本書の執筆は、鈴木孝之があつた。
7. 発掘調査における基準点測量は(株)中央航業に依頼した。遺跡の原点座標は、平面直角座標第Ⅸ系座標に基づくもので、H-15グリッド杭はX座標=-21.651、Y座標=-3.387、H=3.011mである。挿図内の方位記号はすべて座標北を示す。
8. 出土土器の胎土分析は、(株)第四紀地質研究所の井上巖氏、花粉分析・珪藻分析は、バリノ・サーヴェイ(株)に委託した。なお、同時に委託した行田市白鳥田遺跡(昭和60年度中に刊行予定)の試料とは、同一時期(五領式期)・同一器種(S字状口縁台付甕)であるため、地理的には離れるが一括してグラフ化・表化したものを用いた。
9. 本書の編集は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第5課職員があたり、中島利治が監修した。

凡 例

1. 本書に掲載した挿図類の縮尺率は原則として次の通りである。

遺構 方形周溝墓・溝 1/120、土墳・ピット 1/60

遺物 甕・播鉢・石臼・板碑 1/4、甕以外の土器類・玉類 1/3

2. 赤彩された遺物は、その範囲をで示した。

3. 土器実測図中の矢印は、工具の動いた方向を示す。

4. 土器実測図中、稜線の強いものは実線で、やや強いものは破線で、弱いものは途中で切れる実線を用いて図化した。

5. 遺物観察表中、法量の推定値は()で括った。

6. 遺物観察表中、土器各部位の名称は、口縁部、胴部上半・下半、胴部上位・中位・下位、底部、体部、坏下部、柱状部、脚台部のほか、頸部、肩部を便宜的に用いた。

7. 遺物観察表中、胎土は次の記号を用いて示した。

A：赤色粒子 B：角閃石 C：軟らかい白色粒子

D：石英 E：長石 F：金雲母

8. 遺物観察表中、備考欄の百分率の数値は、遺物各部位の残存率を示す。

9. 古墳時代・平安時代という時代区分と、中近世という時期区分とは、区分の基準が異なる。中近世という用語ではなく、鎌倉時代・室町時代・江戸時代という表現がなされて然る可きであるが、時代をそこまで特定することが困難であったため、あえて中近世という用語を本書では用いた。

目 次

序

例言

凡例

I	調査の概要	1
1	調査に至るまでの経過	1
2	調査の経過	4
II	遺跡の立地と環境	7
III	遺跡の概要	11
VI	A区の遺構と遺物	17
(1)	氷川神社跡	17
(2)	土壌	19
V	C区の遺構と遺物	20
1	古墳時代の遺構と遺物	37
(1)	方形周溝墓	37
(2)	土壌・ピット	49
(3)	溝	57
(4)	古墳跡	73
(5)	その他の遺構よりの出土遺物	77
2	平安時代の遺構と遺物	78
(1)	井戸跡	78
(2)	土壌	78
(3)	溝	81
(4)	その他の遺構よりの出土遺物	82
3	中近世の遺構と遺物	86

(1) 井戸跡	86
(2) 土塋	89
(3) 溝	91
(4) 建物跡	96
4 その他の遺物	98
(1) グリッド出土遺物：古墳時代	98
(2) グリッド出土遺物：平安・中近世	99
(3) 貝巢穴痕泥岩	401
(4) 板碑	103
(5) 古銭	104

VI 結語	105
1 蜻蛉遺跡について	105
(1) 古墳時代	105
(2) 平安時代	106
(3) 中近世	107
(4) 中近世における環境	108
(5) まとめ	110
2 蜻蛉遺跡出土の玉類について	110
(1) 石製玉類	110
(2) 土製玉類	111
(3) まとめ	113
3 蜻蛉遺跡において検出された井戸跡について	113
(1) 分類	114
(2) 底面形と深さ	114
(3) まとめ	114

VII 付編

1 蜻蛉遺跡出土の胎土分析結果報告	118
2 蜻蛉遺跡試料花粉分析・珪藻分析報告	126

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	8	第30図	3号方形周溝墓出土遺物(2)	45
第2図	基本土層図	12	第31図	18号土壌出土遺物(1)	51
第3図	遺跡周辺地形図	13	第32図	18号土壌出土遺物(2)	52
第4図	A区全測図	14	第33図	18号土壌出土遺物(3)	53
第5図	C区全測図	15	第34図	1号溝遺物出土状態	57
第6図	氷川神社跡実測図	17	第35図	1号溝出土遺物	F8
第7図	氷川神社跡出土遺物	18	第36図	3号溝出土遺物	61
第8図	1号土壌実測図	19	第37図	13号溝遺物出土状態	62
第9図	1号土壌出土遺物	19	第38図	13号溝出土遺物(1)	63
第10図	時期別遺構分布図	21	第39図	13号溝出土遺物(2)	64
第11図	C区全測図・部分(1)	22	第40図	13号溝出土遺物(3)	65
第12図	C区全測図・部分(2)	23	第41図	18号溝遺物分布図	70
第13図	5号～14号溝の断面図	24	第42図	18号溝出土遺物	71
第14図	C区全測図・部分(3)	25	第43図	古墳跡遺物出土状態	74
第15図	C区全測図・部分(4)	26	第44図	古墳跡出土遺物	75
第16図	C区全測図・部分(5)	27	第45図	その他の遺構よりの出土遺物(1)古墳時代	77
第17図	古墳跡実測図	29	第46図	16号土壌出土遺物	79
第18図	土壌・ビット実測図：古墳時代	30	第47図	その他の遺構よりの出土遺物(2)平安時代	82
第19図	井戸跡・土壌実測図：平安時代	31	第48図	9号井戸跡出土遺物(1)	83
第20図	井戸跡実測図：中近世(1)	32	第49図	9号井戸跡出土遺物(2)	84
第21図	井戸跡・土壌実測図：中近世(2)	33	第50図	井戸跡出土の木製品	90
第22図	井戸跡実測図：中近世(3)	34	第51図	14号溝出土遺物	94
第23図	土壌実測図：中近世(4)	35	第52図	19号溝出土遺物	95
第24図	1号・2号建物跡実測図	36	第53図	グリッド出土遺物(1)古墳時代	97
第25図	1号方形周溝墓出土遺物(1)	40	第54図	グリッド出土遺物(2)中安・中近世	100
第26図	1号方形周溝墓出土遺物(2)	41	第55図	貝巢穴痕泥岩実測図	102
第27図	3号方形周溝墓遺物分布図	42	第56図	板碑拓影図	103
第28図	3号方形周溝墓遺物出土状態	43	第57図	古銭拓影図	104
第29図	3号方形周溝墓出土遺物(1)	44			

付 編

第1図	三角・菱型ダイアグラム	118
第2図	QT-PL相関図	121
第3図	三角ダイアグラム、菱型ダイアグラム	125

図1-1	蜻蛉遺跡 試料採取地点柱状図	127
図1-2	蜻蛉遺物 A・B地点試料主要花粉 胞子化石ダイアグラム	137
図 2	蜻蛉遺跡 A・B地点試料主要 珪藻化石ダイアグラム	138

表 目 次

表1	周辺遺跡地名表	9
表2	周辺遺跡関係参考文献一覧表	10
表3	氷川神社跡出土遺物(第7図)観察表	18
表4	1号土壇出土遺物(第9図)観察表	19
表5	1号方形周溝墓出土遺物(第25・26図) 観察表	37
表6	3号方形周溝墓出土遺物(第29・30図) 観察表	46
表7	18号土壇出土遺物(第31~33図)観察表	53
表8	1号溝出土遺物(第35図)観察表	59
表9	3号溝出土遺物(第36図)観察表	61
表10	13号溝出土遺物(第38~40図)観察表	65
表11	18号溝出土遺物(第42図)観察表	69
表12	古墳跡出土遺物(第44図)観察表	75
表13	その他の遺構よりの出土遺物：古墳時代 (第45図)観察表	77
表14	16号土壇出土遺物(第46図)観察表	80

表15	9号井戸跡出土遺物(第48・49図) 観察表	84
表16	その他の遺構よりの出土遺物(第47図) 観察表	86
表17	14号溝出土遺物(第51図)観察表	93
表18	19号溝出土遺物(第52図)観察表	95
表19	グリッド出土遺物：古墳時代(第53図) 観察表	98
表20	グリッド出土遺物：平安・中近世(第54 図)観察表	99
表21	古銭(第57図)観察表	104
表22	谷塚地区の小名と小字	109

付 編

第1表	胎土性状表	124
表1-1	蜻蛉遺跡花粉分析・珪藻分析試料 表	126
表1-2	蜻蛉遺跡 A・B地点試料花粉分 析結果	132
表 2	蜻蛉遺跡 A・B地点試料珪藻分 析結果	134

図 版 目 次

- 図版1 A区全景 1号土城遺物出土状況
 図版2 C区遠景 常福禪寺近景
 図版3 1号方形周溝墓 2号方形周溝墓
 図版4 3号方形周溝墓全景、近景(コーナー付近)
 図版5 3号方形周溝墓トレンチ部分
 3号方形周溝墓遺物出土状況
 図版6 3号方形周溝墓遺物出土状況
 3号方形周溝墓勾玉出土状況
 図版7 15号土城 18号土城
 図版8 13号溝・1号溝遺物出土状況
 図版9 18号溝全景 18号溝遺物出土状況
 図版10 古墳跡全景 古墳跡遺物出土状況
 図版11 古墳跡ブリッジ北側、古墳跡トレンチ部分
 図版12 古墳跡周溝遺物出土状況
 図版13 1号(右)・2号(左)井戸跡
 8号井戸跡曲物出土状況
 図版14 17号土城 12号井戸跡
 図版15 3号井戸跡 10号井戸跡板碑出土状況
 図版16 7号井戸跡(中央) 7号井戸跡漆
 椀出土状況

- 図版17 14号溝全景 14号溝東側断面
 図版18 1・2号建物跡、6・7・8号溝全
 景
 図版19 A区出土遺物
 図版20 1号・3号方形周溝墓
 5号・15号・18号土城出土遺物
 図版21 18号土城出土遺物
 図版22 1・3号溝出土遺物
 図版23 13号溝出土遺物
 図版24 18号溝、古墳跡出土遺物
 図版25 グリッド、11号、16号土城出土遺物
 図版26 石製紡錘車・石製玉類・土製玉類
 図版27 貝巢穴痕泥岩・陶磁器類
 図版28 陶磁器碗 2号・3号・10号井戸跡
 板碑

付 編

- 図版1-1 蜻蛉遺跡 花粉・胞子化石
 図版1-2 蜻蛉遺跡 花粉・胞子化石
 図版2-1 蜻蛉遺跡 珪藻化石
 図版2-2 蜻蛉遺跡 珪藻化石

I 調査の概要

1 調査に至るまでの経過

埼玉県の東部地域は低地帯にあるため、台風や集中豪雨に見舞われるたびに被害をうけてきた。中でも、昭和56年10月に関東地方をおそった台風24号は草加市、八潮市を中心に大被害をもたらした。そのため埼玉県では「激甚災害対策特別緊急事業」で、辰井川、新河岸川の改修事業を計画した。

県教育局文化財保護課では、開発関係部局と定期的に各種の協議を実施し、文化財の保護と開発事業との調整を図っている。今回の事業の担当課である県土木部河川課とも同様の調整をすすめていた。

昭和58年6月6日付河第328号をもって、土木部河川課長から「河川改修事業用地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」文化財保護課長あて照会がなされた。文化財保護課では、地元教育委員会の協力を得て現地調査を実施した結果、辰井川改修事業用地内に、2か所の遺跡が存在することを確認した。そして、昭和58年6月29日付け教文第261号をもって、埋蔵文化財が存在する旨回答した。その内容はおよそ次のとおりである。

1 埋蔵文化財の所在

事業用地内には草加市No6、No7遺跡が存在し、古墳時代～平安時代の集落跡として把握されている周知の遺跡である。

2 取り扱い

これらの埋蔵文化財は現状保存することが望ましい。しかし、計画上やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法57条3の規定に従い、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。発掘調査を実施する場合には、事前に草加市教育委員会並びに教育局文化財保護課と協議すること。

その後、埋蔵文化財保存のため、文化財保護課と河川課とで協議を重ねたが、計画変更は不可能となった。そのため、やむを得ず事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、公共事業の増大に対処するため昭和55年4月に設置された、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することになり、事業団の調査体制が整えられた。

文化財保護法に基づき、埼玉県知事から埋蔵文化財発掘通知が、事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官にあて提出され、昭和59年1月4日から発掘調査が開始された。

文化庁からは、昭和59年1月18日付け委保第5の12号をもって調査届を受理した旨の通知があった。(文化財保護課)

発掘調査の組織

1. 発掘（昭和58年度）

主 体 者 財崎玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長	長 井 五 郎
副 理 事 長	岩 上 進
常 務 理 事	石 川 正 美
管 理 部 長	佐 野 長 二
	関 野 栄 一
	江 田 和 美
	岡 野 美智子
	福 田 浩
	本 庄 朗 人
調 査 研 究 部 長	横 川 好 富
調 査 研 究 副 部 長	小 川 良 祐
兼 調 査 研 究 第 五 課 長	
調 査 研 究 第 三 課 長	水 村 孝 行
	利 根 川 章 彦
	西 井 幸 雄

庶 務 経 理 財崎玉県埋蔵文化財調査事業団

発 掘 財崎玉県埋蔵文化財調査事業団

調 査 研 究 部 長
調 査 研 究 副 部 長
兼 調 査 研 究 第 五 課 長
調 査 研 究 第 三 課 長

横 川 好 富
小 川 良 祐
水 村 孝 行
利 根 川 章 彦
西 井 幸 雄

2. 発掘（昭和59年度）

主 体 者 財崎玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長	長 井 五 郎
副 理 事 長	岩 上 進
常 務 理 事	石 川 正 美
管 理 部 長	小 宮 秀 男
	関 野 栄 一
	江 田 和 美
	岡 野 美智子
	福 田 浩
	本 庄 朗 人
調 査 研 究 部 長	中 島 利 治
調 査 研 究 副 部 長	小 川 良 祐
兼 調 査 研 究 第 五 課 長	
調 査 研 究 第 三 課 長	水 村 孝 行
	酒 井 清 治
	高 崎 光 司
	西 井 幸 雄
	鈴 木 孝 之

庶 務 経 理 財崎玉県埋蔵文化財調査事業団

発 掘 財崎玉県埋蔵文化財調査事業団

調 査 研 究 部 長
調 査 研 究 副 部 長
兼 調 査 研 究 第 五 課 長
調 査 研 究 第 三 課 長

中 島 利 治
小 川 良 祐
水 村 孝 行
酒 井 清 治
高 崎 光 司
西 井 幸 雄
鈴 木 孝 之

3. 整理

主 体 者 町埼玉県埋蔵文化財調査事業団

庶 務 経 理 町埼玉県埋蔵文化財調査事業団

整 理 町埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長	長 井 五 郎
副 理 事 長	岩 田 明
常 務 理 事 長	町 田 勝 義
兼 管 理 部 長	町 田 勝 義
常 務 理 事 長	町 田 勝 義
兼 管 理 部 長	町 田 勝 義
	関 野 栄 一
	江 田 和 美
	岡 野 美 智 子
	福 田 浩
	本 庄 朗 人
	中 島 利 治
	小 川 良 祐
	鈴 木 孝 之

4. 協力者

草加市教育委員会、草加市史編さん室、地元住民、整理作業関係者

2 調査の経過

蜻蛉遺跡の調査は、昭和59年1月4日～同年10月15日、同年12月15日～昭和60年3月31日までの、延べ12箇月に渡って実施された。途中2箇月の空白期間があるのは、用地未買収箇所が存在により、調査にはいれなかったためである。

調査は3地区に分けて行ない、便宜上北よりA区・B区・C区と命名した。調査対象面積は、各々1,300㎡・500㎡・1,900㎡、計3,700㎡である。以下調査の進行を月毎に記す。

昭和59年 1月 辰井川改修工事の工程及び発掘調査の予定について、県土木部河川課及び中川・綾瀬川総合治水事務所と打合せを行なう。調査のためのプレハブ設置及び器材搬入を終了し、重機によりA地区の表土除去作業にはいる。表土除去作業終了の部分から遺構検出作業を開始。その結果、方形に巡ると思われる溝状遺構と土壇1基が検出される。A地区の表土除去作業終了。降雪多し。雪のため地面がぬかるみ、表土除去作業・遺構検出作業に手間取る。

2月 溝状遺構の調査を開始。溝内より寛永通寶や近世のものと思われる鍬鉢片が出土していることから、近世に属する遺構と考えられるが、方形内には遺構は確認できなかった。降雪のため調査の進展が遅れる。

3月 地籍図や住民の話などから方形に巡る溝状遺構を水川神社跡と推定。同時に土壇の調査を併行して行なう。各遺構とA区全体の実測・写真撮影終了。

昭和58年度をもってA区は終了。

4月 昭和59年度の辰井川改修工事の工程及び発掘調査の予定について、県土木部河川課、中川・綾瀬川総合治水事務所との打合せを行なう。

5月 C区北側から、重機による表土除去作業にはいり、これと併行して遺構検出作業を開始する。

6月 遺跡内における排土の移動のためダンパーを導入する。建物跡2棟と、その周囲を巡っていたと思われる、平行に延びる2～4条溝、更にその南に位置する大溝が検出される。大溝から調査を開始。降雨多し。また低地のため水捌けが悪く、排水作業に多くの時間と労力を費す。

7月 大溝の調査継続と併行して、既に確認されている建物跡・溝・井戸跡の調査にはいる。C区北部においては、近世に属する遺構が多く見られる。

重機によるC区北端部の表土除去作業終了後、B区の除去作業にはいる。排土の搬出に手間がかかる、表土除去作業の進行遅れる。

8月 重機による表土除去作業はひとまず終了。B区は全面、天地返しによると思われる攪乱を受けており、遺構・遺物はまったく検出されなかった。大溝の実測・写真撮影終了。建物跡・溝・井戸跡等も実測・写真撮影終了。大溝北辺に接する位置より、五領式期に属す土器が良好な状態で出土する溝状遺構を検出、調査を開始する。C区北端部の遺構検出作業により、五領式期のものと推定される溝を確認する。

中川・綾瀬川総合治水事務所より、用地買収について一部分結着していない旨連絡を受ける。

9月 泉河川課、用地課、文化財保護課、中川・綾瀬川総合治水事務所と、今後の辰井川改修工事の工程、発掘調査の工程、及び用地買収問題等について打合せを行なう。調査中の遺構は一通り実測・写真撮影を終了する。C区北東部における、円弧を描く溝状遺構の調査を開始、鬼高式期の完形に近い土師器と紡錘車が出土。陸橋部と覚しき箇所もあることから円墳跡の可能性を想定する。実測・写真撮影終了。

10月 用地買収問題が結着せず、調査終了範囲以南に進めないため、結着するまで調査を中断することに決まる。プレハブ内に一部器材を残して、15日撤収。

12月 中川・綾瀬川総合治水事務所、地主と今後の調査の工程、排土の処理問題について打合せを行なう。用地買収の結着していない箇所を除外して、重機による表土除去作業を開始。始めにトラクタの搬入路づくりを行なう。

各種器材の搬入。9月の時点で円墳跡の可能性のあった溝状遺構の掘り残し部分の調査を実施。遺構検出作業を併行して行なう。

昭和60年 1月 円墳の可能性の可否を確かめるため、調査範囲外に、地主の方の許可を載いてトレンチ掘りを行なう。その結果、内径約15mの円墳跡であることが確定した。円墳跡及びトレンチ内の実測・写真撮影終了後、即日トレンチを埋め戻す。未買収部分について、地主の方より発掘調査の許可が降り、重機による表土除去作業を行なう。遺構検出作業の後、南端部より調査にはいる。大部分が調査範囲外にあると考えられるが、一箇所大きくカーブを描く溝状遺構が検出される。五領式期の土器が出土することから、円墳跡、方墳跡或いは方形周溝墓等の可能性が検討されたが、調査の結果コーナーが確認され、円墳跡の可能性はなくなった。同遺構内より、メノウ製勾玉1点が出土。

2月 方墳跡もしくは、方形周溝墓の平面規模確定のため、調査範囲外に地主の方の許可を載いて、トレンチ掘りを行ない、コーナーを検出。内径約20mの数値を得る。実測・写真撮影の後、即日トレンチを埋め戻す。周溝内より、メノウ製切子玉1点出土。C区南部に位置する遺構を一通り終了させる。

降雨が多く水捌けが悪いため、排水作業に多くの時間や労力を費すこととなり、調査捗らず。井戸跡において、雨水や湧水のため、崩壊する例が多くなる。中世の所産と考えられる井戸跡が、2基並んで検出され漆碗、曲物出土する。

調査対象区域内における用地買収は、すべて終了した旨中川・綾瀬川総合治水事務所より連絡を受ける。

3月 C区中央より、近接した位置関係で、方形周溝墓2基を検出。方墳跡・方形周溝墓両方の可能性のあった遺構の方形の枠内から、時期的に後出の土壌が同一確認面より検出される。この結果、墳丘の存在は考えにくくなり、方形周溝墓であると判断した。

C区内のすべての遺構につき、実測・写真撮影を終了。プレハブとすべての器材を撤収、事務所敷地内の整地を終え、31日調査を終了した。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

蜻蛉遺跡の存在する草加市は中川低地の南の一角に、また荒川低地の東端に位置しており、県内においても最も標高の低い地域となっている。蜻蛉遺跡のすぐ南には埼玉県と東京都との境川となっている毛長川が流れている。現在の毛長川はどこにでも見られるような小さな川であるが、かつては旧入間川本流が流れており、遺跡付近での川幅は300～400mと広がったことを地図から読みとることができる。蜻蛉遺跡はこの旧入間川が形成した自然堤防上に立地している。

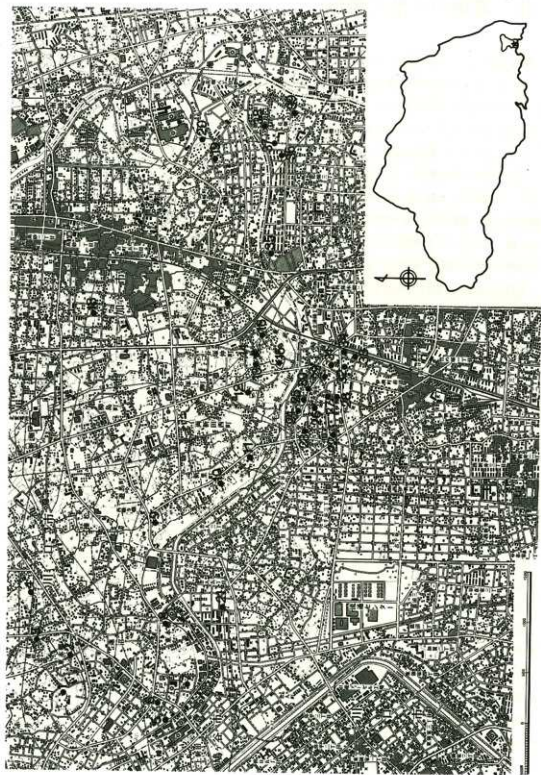
毛長川流域の自然堤防上には右岸の東京都側を除き、ほとんど遺跡の存在は知られていなかった。しかし、1981年に草加市及び八潮市史編さん室との合同の分布調査によって、新たに多くの遺跡が確認された。遺跡の多くは毛長川流域の自然堤防上に存在するが、古綾瀬川や中川の自然堤防上にも立地していることが判明した。分布調査によって確認された遺跡の時期は、低地の貝塚として著名な縄文時代後晩期の東光院貝塚⁷⁾を除き、すべてが古墳時代以降のものであった。

毛長川流域の古墳時代初頭を考える上で欠かすことのできない遺跡として伊興遺跡が存在する(⑫・⑬)。伊興遺跡(25～27)は祭祀遺跡として有名で、多量の石製模造品とともに小型の鏡と子持勾玉も出土しており、関東地方において有数の祭祀遺跡といえることができる。弥生時代の遺跡の存在しない毛長川流域において、なぜ突如として伊興遺跡のような祭祀遺跡が出現したのか大いに問題のあるところである。こうした伊興遺跡とともに古くから注目されているものに高稲荷古墳(4)がある。高稲荷古墳は全長75mの前方後円墳で、県内でも最古の部類に属し、県南では最大の前方後円墳である。弥生時代にはあまり発展の見られなかった当地域において、高稲荷古墳の出現の契機は問題となる。伊興遺跡と高稲荷古墳の出現は有機的な結びつきがあるのではという見解がある。つまり、毛長川流域は東京湾から北武蔵に入る河川交通上の要衝で、大和朝廷の東国経営の軍事的拠点のひとつであったために、両遺跡が出現したといわれている(⑥～⑧)。確かに、高稲荷古墳は毛長川流域を見下ろす位置に立地している。

古墳は毛長川右岸に多く残っている。左岸の草加市周辺には見られないが、「新編武蔵風土記稿」には古墳の記載が多くあり、古墳群が存在していたと考えられている(⑥)。今回の調査によって、古墳の周溝跡を検出したことは、それを証明しているといえよう。古墳の年代は右岸の古墳から出土している遺物から、6～7世紀代の後期古墳ではないかといわれている。

奈良・平安時代の遺跡も多く存在する。西地総田遺跡⁹⁾においても五領式期の遺構とともに平安時代の井戸跡が検出されている。須恵器は南北企業跡群¹⁰⁾のものが多く散布しており、一部湖西窯のものはいり込んでいる。また、流域には灰軸陶器の出土率も高く、猿投産の灰軸陶器が多い。県内の灰軸陶器の分布を見ると、東濃・尾北産の灰軸陶器は県北地方に分布し、猿投産の灰軸陶器は旧入間川水系に多く分布することから、草加市周辺の猿投産の灰軸陶器は海路から運び込まれた可能性が高いといえよう。

このように、毛長川流域の遺跡は、古墳時代初頭から平安時代まで河川交通と深い関わりをなかで存在したのではないかと考えられるのである。



第1図 周辺道路分布図

表1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	所在地	コードNo	文献
1	文化放送中継所敷地内遺跡	集落跡	縄文～平安	川口市大字赤井字台、西浦、他	78	①
2	八兵衛山古墳	前方後円墳	古墳(後)	川口市大字東本郷字曲輪	81	②・③
3	東本郷弥生遺跡	集落跡・他	弥生(後)・古墳	川口市大字東本郷字峯岸	80	①
4	高稲荷古墳	前方後援墳	古墳(前)	川口市大字峯字峯後991	82	④・⑤
5		散布地	古墳(前)	川口市大字江戸袋字上郷中		
6		集落跡	古墳・平安	川口市大字江戸袋		
7	東光院貝塚	貝塚・集落跡	縄文・古墳	川口市大字江戸袋字下郷中854附近	133	③
8		集落跡	古墳(前)他	川口市大字江戸袋字高畑	134	
9		散布地	平安	草加市遊馬町字本田南通		⑥
10		散布地	縄文・古墳	草加市新里町字毛長沼外瓦		⑥
11		散布地	古墳	草加市新里町字毛長沼外瓦		⑥
12		散布地	平安	草加市谷塚上町字堀返		⑥
13		散布地	平安	草加市谷塚仲町字蜻蛉		⑧
14	蜻蛉遺跡	古墳跡・他	古墳・平安・中近世	草加市谷塚仲町字蜻蛉156番地		本書・⑧
15		散布地	古墳・平安	草加市谷塚仲町字沼田・立野		⑧
16	西地総田遺跡		古墳・平安	草加市谷塚町字西地総田		⑧～⑨
17	東地総田遺跡		縄文・古墳・平安	草加市谷塚町字東地総田		⑧
18	御殿稲荷古墳	古墳	古墳(不明)	草加市氷川町425-1		
19		散布地	古墳・平安	草加市瀬崎町字門木		⑧
20		散布地	古墳・平安	草加市瀬崎字堤外		⑧
21		散布地	古墳	足立区入谷町 氷川神社境内	21-3	⑩・⑪
22		散布地	古墳	足立区東伊興町		
23	聖塚古墳	古墳(円)	古墳	足立区東伊興町	21-5	⑩・⑪
24	船山塚	古墳?	古墳	足立区東伊興町	21-12	⑫～⑭
25	伊興遺跡(谷下地区)	祭祀遺跡	古墳(前～後)	足立区東伊興町 氷川神社東部	21-10	⑫～⑭
26	伊興遺跡(狭間地区)	祭祀遺跡	古墳(前～後)	足立区伊興町狭間	21-13	⑫～⑭
27	伊興遺跡(常福寺地区)	祭祀遺跡	弥生末～古墳轉	足立区伊興町狭間859番地		
28			古墳	足立区東伊興町		
29			弥生	足立区東伊興町		
30	金塚古墳	古墳	古墳	足立区伊興町谷下	21-11	⑩・⑪
31		古墳	古墳	足立区伊興町		
32	甲塚古墳	古墳(円)	古墳	足立区伊興町	21-8	⑩・⑪
33		古墳	古墳	足立区伊興町		
34	白幡塚古墳	古墳(円)	古墳	足立区伊興町 白幡神社内	21-7	⑩・⑪
35		散布地	弥生	足立区花畑町 水神橋付近	27-20	
36	白山塚古墳	古墳(円)	古墳	足立区花畑町 花畑同地内	21-21	⑩・⑪
37	一本松古墳	古墳(円)	古墳	足立区花畑町 花畑団地毛長堀脇	21-22	⑮
38		散布地	弥生	足立区大鷲神社付近	21-23	
39		古墳	古墳	足立区花畑町6丁目		

表2 周辺遺跡関係参考文献一覧表

①	川口市教育委員会	1959	『川口市東本郷の遺跡』
②	本間岳史	1979	『付篇伝八兵衛山古墳』『吉岡・東本郷台・上一斗葎遺跡』埼玉遺跡調査会
③	川口市教育委員会	1980	『川口市遺跡地名表』川口市文化財調査報告書第13集
④	大塚初重	1965	『埼玉県川口市高稲荷古墳』『日本考古学年報13』日本考古学協会
⑤	埼玉県史編さん室	1982	『高稲荷古墳』『新編埼玉県史 資料編2 原始・古代』
⑥	高橋一夫	1982	『草加の遺跡1』—毛長川流域を中心として—『草加市史研究2』草加市
⑦	"	1983	『草加の遺跡2』—西地総田遺跡の調査—『草加市史研究3』草加市
⑧	"	1984	『西地総田遺跡発掘調査報告』草加市の文化財(10)草加市教育委員会
⑨	景間喜博	1981	『谷塚町所在須恵器・土師器散布地について』
⑩	西垣隆雄	1955	『足立区の遺跡と遺物』『足立区史』
⑪	"	1967	『足立区の遺跡と遺物』『新修足立区史』
⑫	大場磐雄 他	1962	『武蔵伊興』国学院大学考古学研究報告第二冊
⑬	"	1975	『武蔵伊興遺跡』伊興遺跡調査団
⑭	永峯光一	1976	『荒川沿岸地区における考古学的調査』東京都埋蔵文化財報告第3集 東京都教育委員会
⑮	西垣隆雄	1955	『花畑の古墳』『足立区史』

本遺跡分布図作成にあたっては、上記の文献の他に以下の文献を参考とした。

⑯	埼玉県教育委員会	1975	『埼玉県遺跡地名表』
⑰	文化庁文化財保護部	1977	『全国遺跡地図 埼玉県』
	"	1976	『 " 東京都』
⑱	可児弘明	1961	『東京東部における低地帯と集落の発達 上・下』『考古学雑誌 47-1・2』日本考古学会

「周辺遺跡地名表」中のコードNoは、埼玉国内の遺跡については文献⑯、東京都内の遺跡については文献⑱に記載されているものを用いた。

Ⅲ 遺跡の概観

蜻蛉遺跡の存在する草加市は、県東部に形成された中川低地の南の一角に位置し、標高は4 m前後で、県内で最も低い地域の一つである。中川低地には元荒川・古利根川・中川・綾瀬川・毛長川など県内の主要河川が流れており、本遺跡の立地するのは東京都との境界となっている毛長川（旧入間川）左岸の自然堤防上である。遺跡近辺の標高は3 m前後で、地形的変化も小さい。

遺跡は、ほぼ南北方向に改修される辰井川用地内の3地点に亘って存在し、便宜上北よりA区・B区・C区（第3図参照）と命名した。

各区より検出された遺構は以下の通りである。

A区 平安時代の土壌1基、近世の水川神社跡1基。

C区 古墳時代前期（五領式期）：方形周溝墓3基・土壌8基・ピット2基・溝5条、同後期（鬼高式期）：古墳跡1基、平安時代：井戸跡2基・土壌4基・溝3条、中近世：井戸跡10基・土壌3基・溝12～14条・建物跡2棟。

なお、B区は全面に天地返しと思われる攪乱を受けており、遺構・遺物は検出されていないため記述を省略する。

古墳時代前期（五領式期）の遺構はC区のみに限られた同区全域に分布するが、各遺構の確認範囲は小さくその性格を知るには不十分なことが多い。3基の方形周溝墓とL字形を呈す18号溝は方位的に対応している点は注目される。

古墳時代後期（鬼高式期）の古墳跡が1基、周溝のおよそ3分の1の調査ではあったが確認された。規模は周溝内径約15.3mの円墳と推定される。また遺構外からの検出ではあるが、鬼高式期に属す土師質灰が2点確認されており、遺跡近辺における鬼高式期に属す遺構の存在が想定される。

平安時代の遺構は、A区から土壌1基が検出されている他は、すべてC区中央部～南部に存在する。他の時代の遺構と同様、調査可能な範囲が小さいこと、遺存状態が悪いこと等により性格を知することは難しい。僅かに16号土壌のみが、祭祀的遺構の可能性を窺わせるのみで、他はいずれも性格不明である。

中近世の遺構は、A区においては水川神社跡が検出されている他は、すべてC区内に存在する。

井戸跡は湧水のため深さの確認に困難を伴ったが、中近世の所産と考えられるもののみで10基を数える点は注目されよう。建物跡2棟と、その周りを巡っていると考えられる複数の溝は、その付近がかって「寺屋敷」という地名で呼ばれていたという事実と、何らかの関連をもつものかもしれない。

本遺跡の特徴

本遺跡の特徴は以下の3点にまとめられよう。

- 1、調査区南部の比較的狭い範囲に、方形周溝墓や古墳跡と見做し得る遺構が集中しており、該期の墓域として更に広がりをもつと考えられる。これは本近辺に、集落存在の可能性を窺

せる。

- 2、古墳時代前期（五領式期）に属する出土土器の中には、東海系のS字状口縁台付甕がかなりの頻度で出土しており、東海地方との深い関連を想定させる。そしてその要路としては、毛長川が考えられる。
- 3、途中一時的に遺構が途絶えはするが、自然堤防上という立地条件・調査面積の狭さ等々に対して、時代的にかなり連続しているといえる遺跡である。

なお、現在草加市内には古墳と確認される遺構は知られていない。しかし、『新編武蔵風土記稿』の草加市内に関する記事の中には古墳と見做し得る記述があり、従来その存在が考えられてきた。今回の調査で検出された古墳跡は、その例証となる。

第2図に本遺跡の基本土層図を示した。各層位の仔細は以下の通りである。

I層：表土

II層：暗褐色土

III層：白色粘土 鉄分を含む

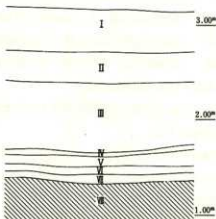
IV層：黄色粘質土 鉄分を含む

V層：灰色粘質土 斑文状に砂粒を含む

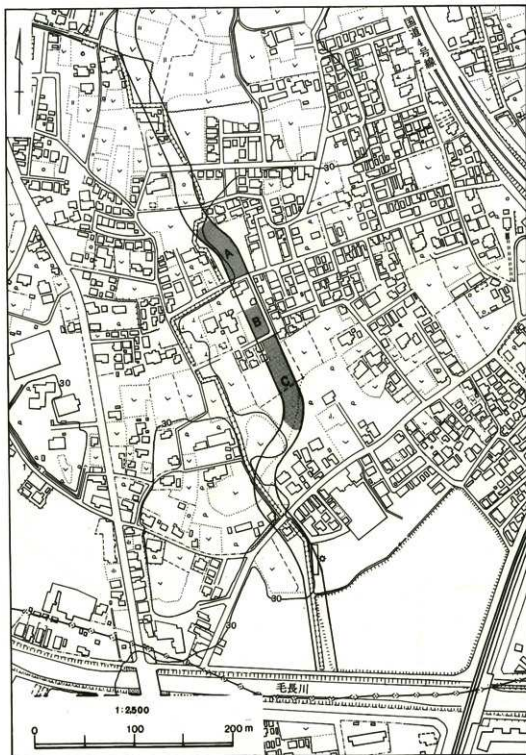
VI層：橙褐色砂層 鉄分を含む

VII層：灰白色粘質土 微砂粒を含む

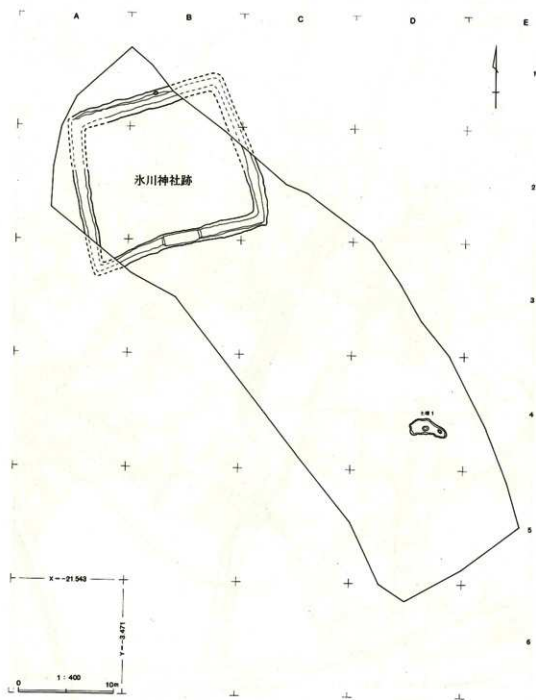
VIII層：砂層



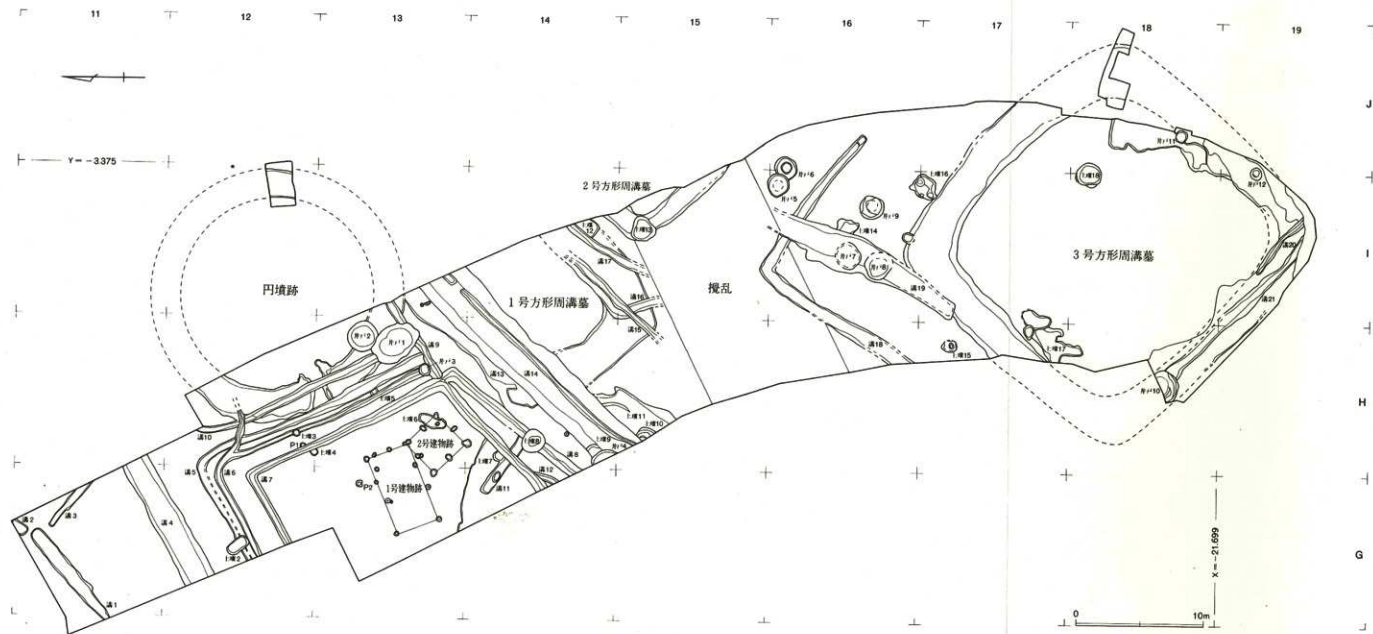
第2図 基本土層図



第3図 遺跡周辺地形図

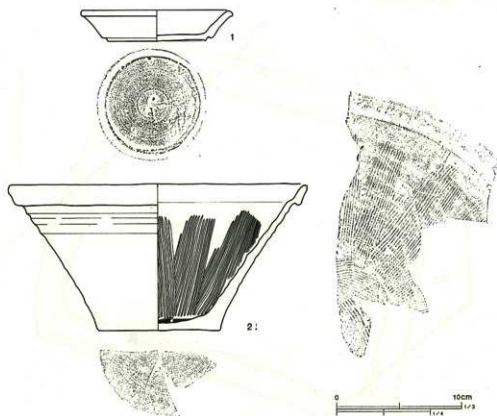


第4図 A区全測図



第5图 C区全测图

A区北西端より検出された。建物跡と覚しき遺構はみられなかったが、周囲を巡っていたと思われる溝が確認された。長軸約20m、短軸約17m、溝の深さは約60cmを測り、溝内からは寛永通寶7点（第57図）とそれに伴うエゴノミの種子12点、高台付坏、その他に播鉢片（第7図）が出土した。本遺構を氷川神社跡とする直接的な資料は得られなかったが、地籍図、住民の話、出土遺物の年代等から推して、江戸時代末に存在した氷川神社の跡であると判断した。



第7図 氷川神社跡出土遺物

表3 氷川神社跡出土遺物（第7図）観察表

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	高台付 坏	口径 11.4 高台径 8.7 器高 2.1	口縁は直線的に開き、端部は肥厚して外反する。底部：静止糸切りの後高台貼り付け。底部外面を除く全面に透明釉を施す。	素地 乳白色 釉 透明色 焼成 良好	完形
2	播鉢 鉢	底径 (14.6) 器高 15.0	厚さ0.7～1.3cm。平らな底部より斜めに立上がる。口縁部内面に稜をもつ。ろくろ整形。底部回転糸切り。左回りの方向で、底面～体部上位まで櫛目を施す。櫛目は16本単位。ほぼ全面に鉄釉を施す。常滑産。	B～D 暗茶褐色 焼成 良好	体部 25% 底部 30%

(2) 土 壙

1号土壙 (第8図)

A区東南部のD-4グリッドに位置する。長軸約4.0m、短軸約1.6m、深さ約20~30cmを測り、不整形を呈す。2基以上の土壙が重複している可能性も考えられる。遺構内からは土師質の坏が4点出土しており、時期は平安時代と推定されるが、その性格については不明である。

第8図 1号土壙実測図



- 1 擾乱土
- 2 黒色土
- 3 暗灰褐色粘土 鉄分粒子・ローム粒子を含む
- 4 明灰褐色粘土 鉄分粒子・黒色土ブロックを含む

第9図 1号土壙出土遺物

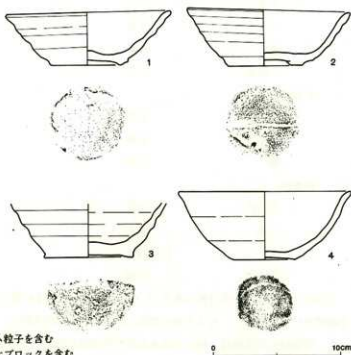


表4 1号土壙出土遺物(第9図)観察表

番号	器 種	大きさ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	坏	口径 13.1	器面は荒れている。坏部：回転ナデか。底部：右回	A~E	坏部 60%
	土師器	底径 6.0	転糸切りか。Aを多く含む。	褐色	底部 100%
		器高 4.2		焼成 普通	
2	坏	口径 13.0	器面は荒れている。坏部：回転ナデか。底部：回転	A~E	坏部 60%
	土師器	底径 6.0	糸切りか。	褐色	底部 100%
		器高 4.9		焼成 普通	
3	坏	底径 (7.1)	器面は非常に荒れている。坏部：回転ナデ。底部：	A~E	坏部 30%
	土師器	現存高 4.4	回転糸切りか。Aを多く含み、1と同一の胎土と思	褐色	底部 45%
			われる。	焼成 普通	
4	坏	口径 (13.8)	器面は非常に荒れている。坏部：回転ナデか。底部	A~E	坏部 35%
	土師器	底径 4.9	：回転糸切りか。内面は黒色。	褐色	底部 100%
		器高 5.4		焼成 普通	

V C区の遺構と遺物

C区においては以下の遺構が検出された。

古墳時代

方形周溝墓	3基
土壇	8基
ピット	2基
溝	5条
古墳跡	1基

平安時代

井戸跡	2基
土壇	4基
溝	3基

中近世

井戸跡	10基
土壇	3基
溝	12～14条
建物跡	2棟

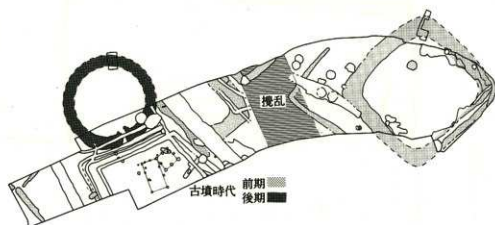
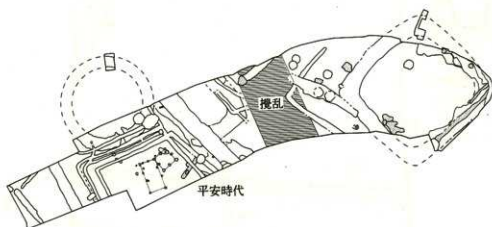
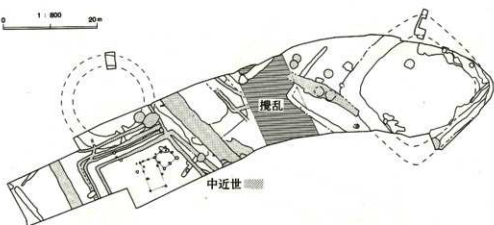
A区に比べ遺構の分布は密であり、人工の加えられた期間も更に広がる。C区における遺構の分布を時期別にながめると、およそ次の事項に気付く（第10図参照）。

1. 古墳時代の遺構は、疎らではあるがC区全域に分布している。
2. 平安時代の遺構は、他の時期に比べ遺構数が最も少なく、その分布はC区の南半部に限られている。
3. 中近世の遺構はほぼC区全域に分布しているが、強いて述べるならば、中央部にやや偏りがあるといえる。

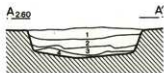
以上は、C区という面積約1,900㎡のごく限られた範囲内での調査の結果によっている。将来、この周辺での調査面積が増えれば、ここに述べた様相は現時点におけるものとは異なったものになることは充分に予想できる。

以下に述べる事柄は、あくまでも現況による知見に基づいたものである。

0 1 : 500 20 m



第10図 時期別遺構分布図



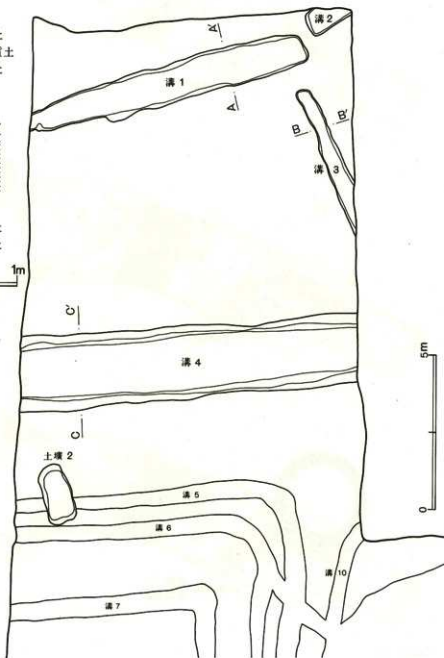
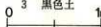
A-A'

- 1 黑色土
- 2 黑褐色土
- 3 黑色粘質土
- 4 黑褐色土

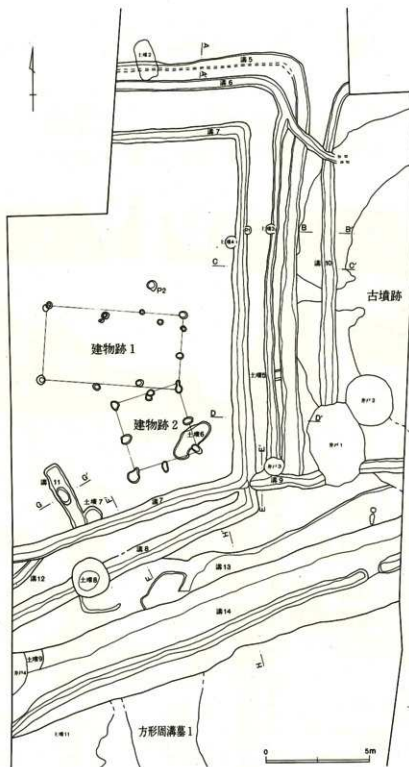


B-B'

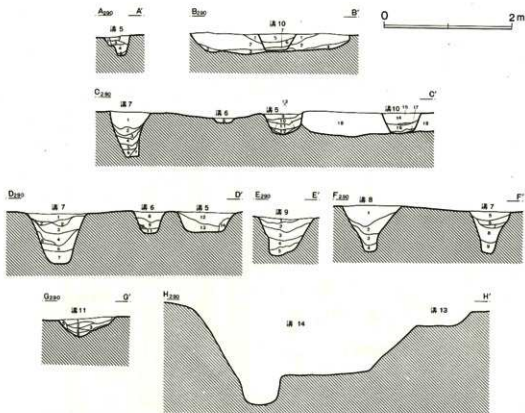
- 1 暗褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 黑色土



第11图 C区全测图・部分(1)



第12図 C区全測図・部分(2)



第13図 5号～14号溝の断面図

A-A'

- 1層：暗褐色土 ローム粒子多
- 2層：暗褐色土 ローム粒子少
- 3層：黒色土
- 4層：黒褐色土 ローム粒子多 粘性強
- 5層：暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少

B-B'

- 1層：黒褐色土 ローム粒子少
- 2層：黒褐色土 ローム粒子多
- 3層：黒色土 ローム粒子少 粘性強
- 4層：黒褐色土 ローム粒子少 粘性強
- 5層：暗褐色土 ローム粒子少
- 6層：暗褐色土 ローム粒子多
- 7層：白色粘質土

C-C'

- 1層：暗褐色土
- 2層：黒色土 ローム粒子少
- 3層：白色粘質土
- 4層：白黄色土 白色粘土と黄色粘土よりなる
- 5層：暗褐色土 粘性強
- 6層：白黄色土 4層に類似するがやや砂質
- 7層：灰色土
- 8層：暗褐色土 ローム粒子多
- 10層：暗褐色土 ローム粒子多

11層：黒色土

- 12層：黒褐色土
- 13層：暗黄褐色土
- 14層：暗褐色土 ローム粒子少
- 15層：黒色土 ローム粒子多
- 16層：暗褐色土 ローム粒子多
- 17層：白色粘質土

18層：古墳周溝部覆土

D-D'

- 1層：暗褐色土
- 2層：黒色土 ローム粒子少
- 3層：白色粘質土
- 4層：白黄色土 白色粘土と黄色粘土よりなる
- 5層：暗褐色土 粘性強
- 6層：白黄色土 4層に類似するがやや砂質
- 7層：灰色土

8層：黒色土

- 9層：黒色土 ローム粒子多
- 10層：暗褐色土
- 11層：暗褐色土 ローム粒子やや多
- 12層：暗褐色土 ローム粒子多
- 13層：黒褐色土
- 14層：黒色土 ローム粒子多

E-E'

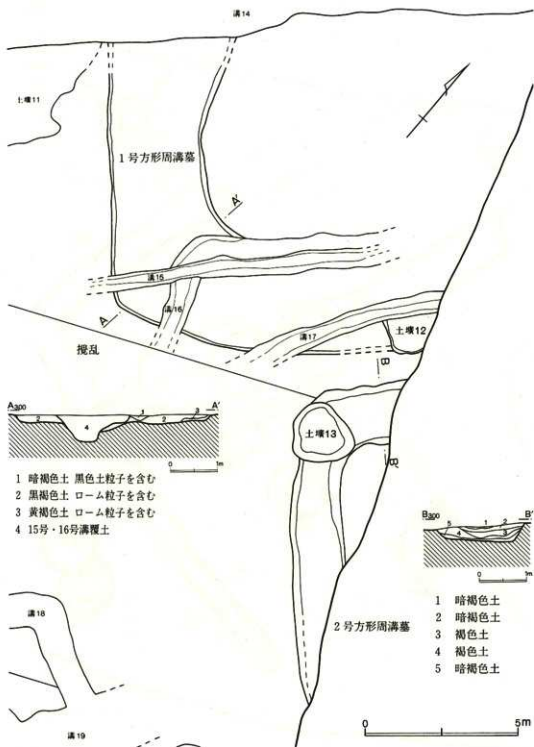
- 1層：茶褐色土
- 2層：暗褐色土
- 3層：茶褐色土 ローム粒子多
- 4層：茶褐色土 ローム粒子少
- 5層：褐色土 ローム粒子少

F-F'

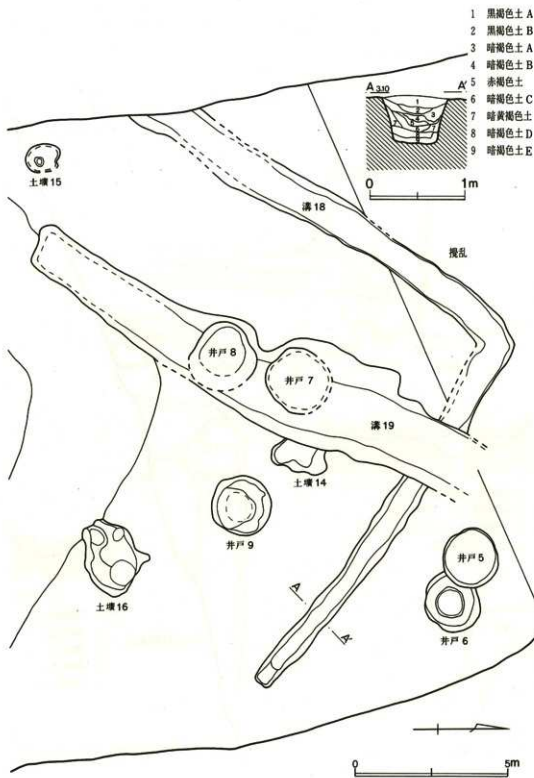
- 1層：黒褐色土
- 2層：黒褐色土 粘土ブロック混入
- 3層：黒色土 しまり強
- 4層：黒色土 ローム粒子多
- 5層：暗褐色土
- 6層：黒色土
- 7層：白色粘質土
- 8層：白黄色土 白色粘土と黄色粘土よりなる
- 9層：灰褐色土

G-G'

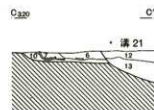
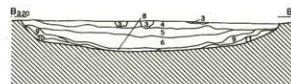
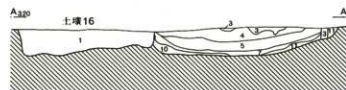
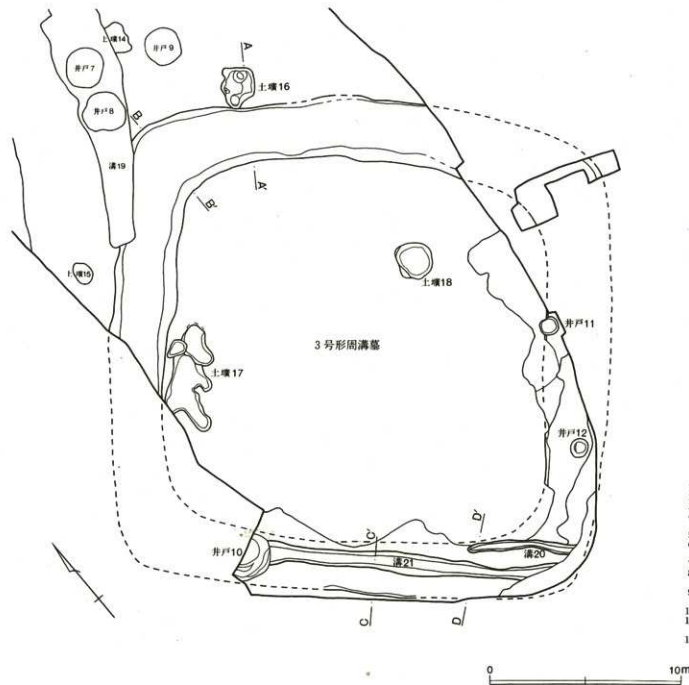
- 1層：黒色土 ローム粒子少
- 2層：黒褐色土 粘土粒子多
- 3層：黒褐色土
- 4層：黒色土 粘土粒子多
- 5層：黒褐色土
- 6層：黒色土 ロームブロック混入



第14図 C区全測図・部分(3)

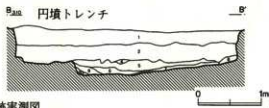
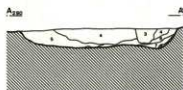
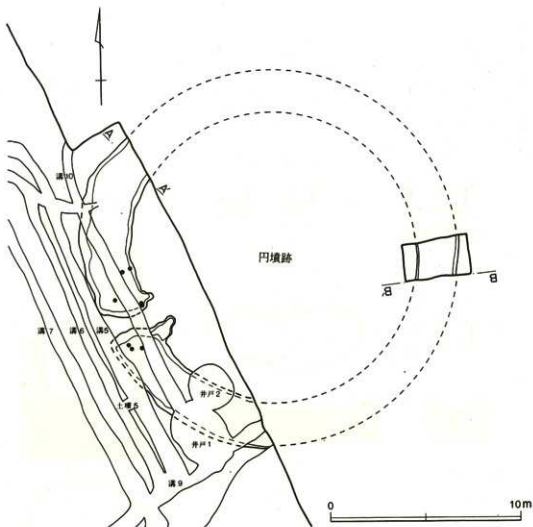


第15图 C区全测图・部分(4)



- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 16号土層覆土 | 13 黒褐色土 鉄分粒子、粘土粒子を少量含む |
| 2 緑色土 | 14 黒褐色土 鉄分粒子を少量含む |
| 3 褐色土 | 15 黒褐色土 鉄分粒子、砂粒を少量含む |
| 4 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む | 16 黒褐色土 砂粒を多目に含む |
| 5 黒褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む | 17 暗褐色土 粘土ブロック、砂粒を含む |
| 6 黒褐色土 鉄分粒子を多量に含む | 18 黒褐色土 粘土粒子、鉄分を多目に含む |
| 7 暗褐色土 鉄分粒子を少量含む | 19 黒褐色土 鉄分粒子を少量含む |
| 8 黒褐色土 炭化粒子を少量含む | 20 青灰色土 砂層内に黒色土を少量含む |
| 9 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を多量に含む | 21 暗褐色土 砂粒を微量含む |
| 10 暗褐色土 炭化粒子を少量含む | 22 暗褐色土 砂粒を少量含む |
| 11 暗褐色土 粘土粒子、鉄分粒子を含む | 23 暗褐色土 砂粒を多目に含む |
| 12 黒褐色土 粘土粒子、鉄分粒子を微量含む | |

第16図 C区全測図・部分(5)

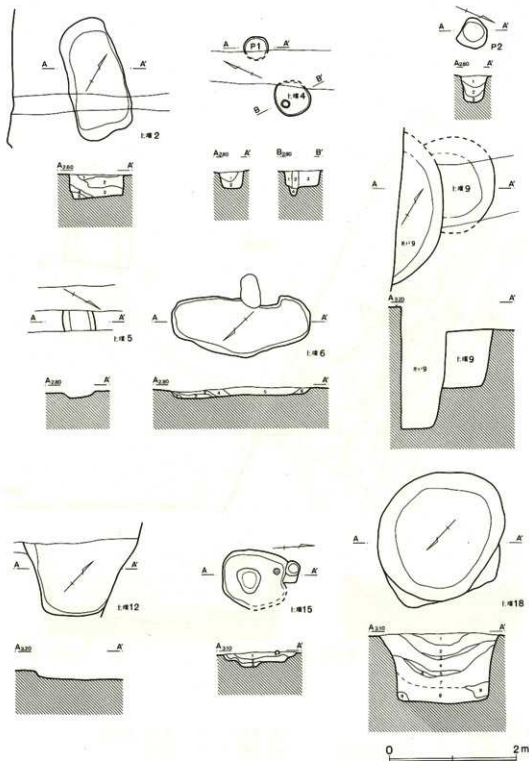


第17図 古墳跡実測図

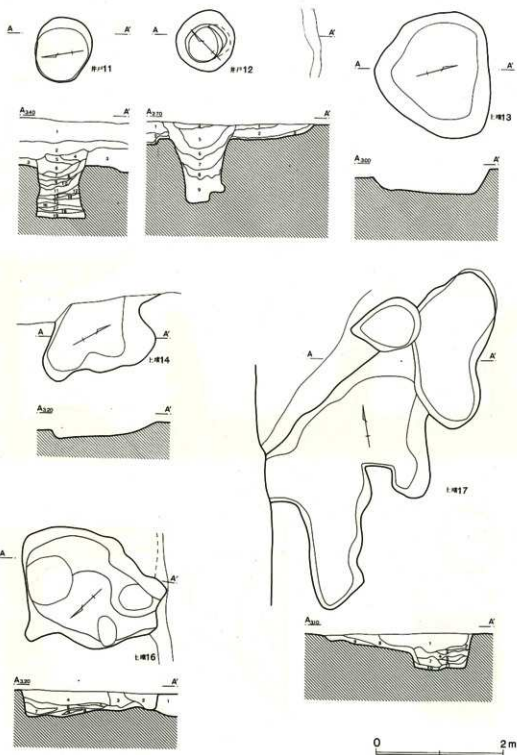
古墳跡

- 1層：耕作土
2層：耕作土 ローム粒子・黒色粒子少。
3層：攪乱
4層：黒褐色土 ローム粒子少
5層：黒褐色土 ローム粒子多

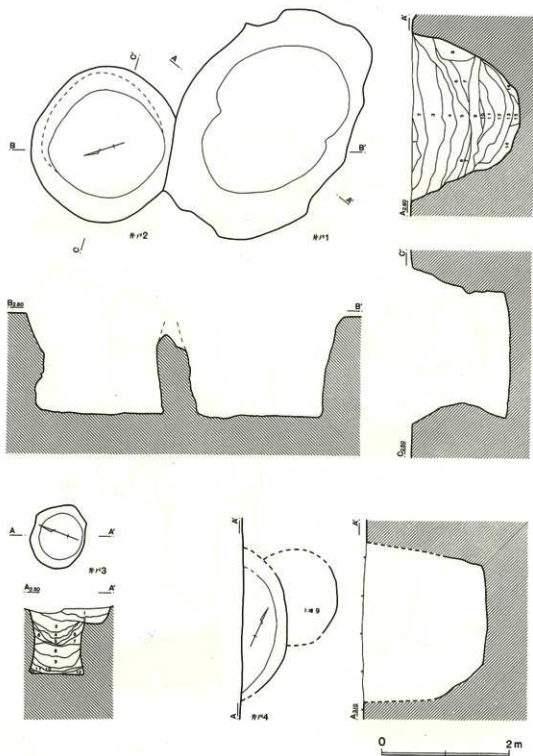
- 6層：黒色土 ローム粒子少 粘性強
7層：暗褐色土 ローム粒子多
8層：黒色土 黒色土と粘土ブロックよりなる
9層：黒色土 ローム粒子少 粘性強
10層：暗黄褐色土 周溝壁面よりの崩落土



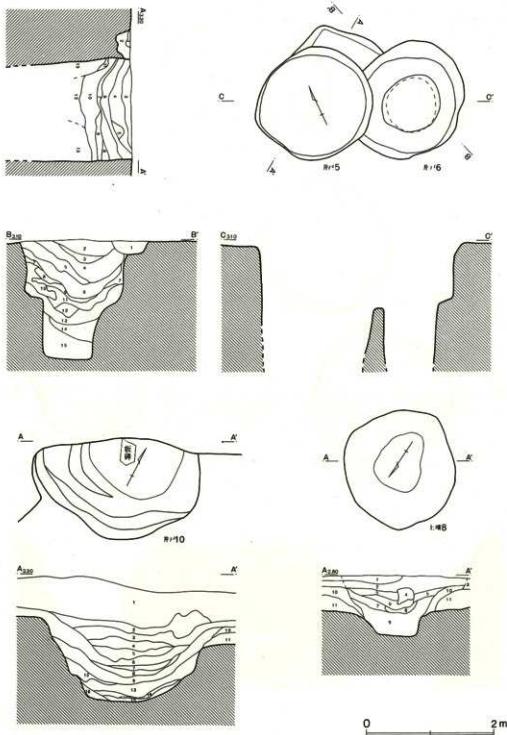
第18図 土坑・ピット実測図：古墳時代



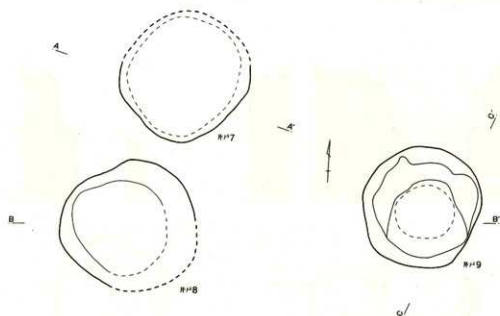
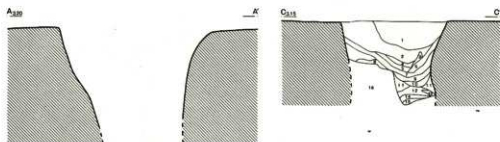
第19図 井戸跡・土城実測図：平安時代



第20圖 中近世(I):井戸跡実測図

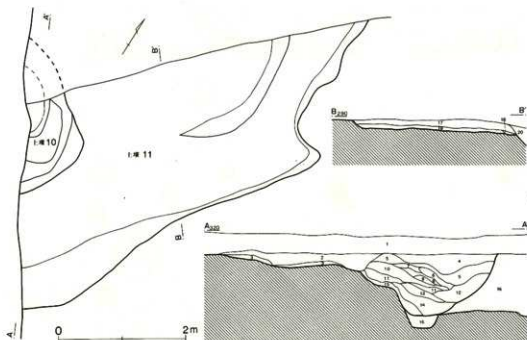


第21図 中近世(2)：井戸跡・土坑実測図



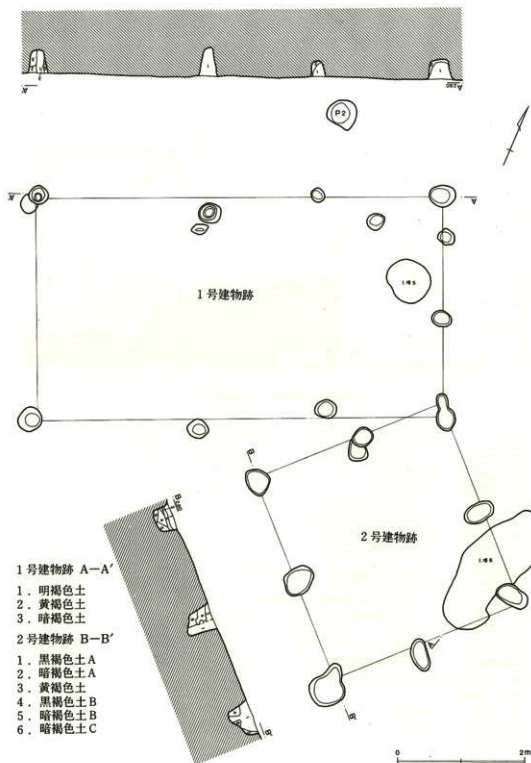
0 2m

第22図 中近世(3): 井戸跡実測図



第23図 中近世(4)：土壌実測図

- | | |
|------------|---------------------|
| 1層：耕作土 | |
| 2層：黒褐色土 | ローム粒子少 |
| 3層：暗黄褐色土 | ローム粒子多 |
| 4層：黒褐色土 | ローム粒子・炭化粒子少 |
| 5層：黒褐色土 | ローム粒子多・炭化粒子少 |
| 6層：暗褐色土 | ローム粒子・炭化粒子少 |
| 7層：黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子少 |
| 8層：黒褐色土 | ローム粒子・鉄分粒子少 |
| 9層：暗褐色土 | ローム粒子・炭化粒子多 |
| 10層：黒褐色土 | ローム粒子やや多・炭化粒子・鉄分粒子少 |
| 11層：暗褐色土 | ローム粒子・鉄分粒子多 |
| 12層：暗黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多 |
| 13層：暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック少 |
| 14層：黒褐色土 | ローム粒子・鉄分粒子多 |
| 15層：暗黄褐色土 | ロームブロック多 |
| 16層：14号溝覆土 | |
| 17層：黒褐色土 | 2層に類似 |
| 18層：暗褐色土 | 3層に類似 |
| 19層：黄褐色土 | ロームブロック多 |
| 20層：14号溝覆土 | |



第24图 1号・2号建物跡実測図

1 古墳時代の遺構と遺物

(1) 方形周溝墓

本遺跡からは3基の方形周溝墓が、C区中央から南端にかけて、比較的近接した状態で確認された。

3基とも部分のみの調査であり、遺存状態良好とはいえないが、遺構の平面形・出土遺物の時期等から方形周溝墓と判断した。なお、各方形周溝墓とも主体部は検出できなかった。

1号方形周溝墓（第14図・25図・26図）

H-14～I-14グリッドにかけて位置する。遺存状態は三基中最も悪く、周溝西辺は14号溝に掘乱され、南辺も東へいくに従って立ち上がりが消えてしまっている。更にコーナー付近も溝や土壌によって切られている。

周溝の最大幅は約4.16m、溝底幅は3.96m、深さは最もよく残っている箇所約36cmを測るにとどまる。周溝底面は比較的しっかりしており、凹凸も少ない。周溝断面はU字形を呈すと思われるが、コーナーは一箇所のみの検出であること、周溝は直角に交わる二辺のみの調査であることなどから平面規模は不明である。土層断面には、方台部からの封土の流れ込みと考えられる層（第3層）が観察された。

遺物は、コーナー付近に比較的集中する傾向をもち、壺・埴・甕・S字甕・S字鉢・器台・高坏・土玉等が出土した。器台（第26図22）と土玉（同図24）を除いてはいずれも部分もしくは破片のみの出土である。

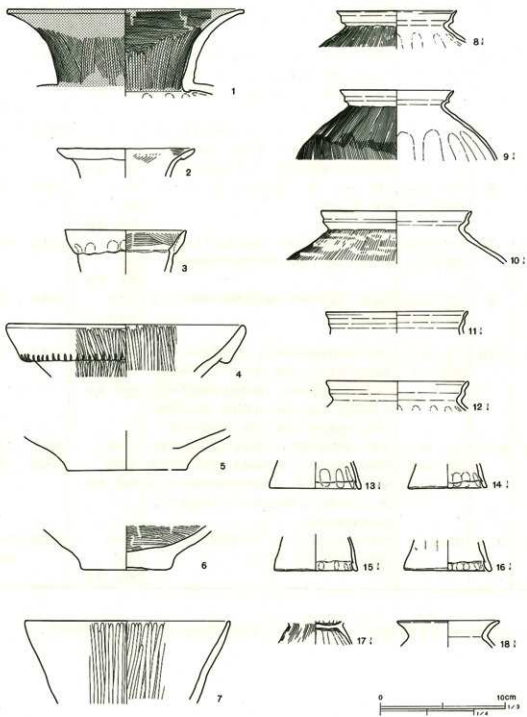
表5 1号方形周溝墓出土遺物（第25・26図）観察表

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	壺	口径 (18.8) 現存高 6.8	胴部内面を除き丹彩。口縁部外面：縦位の刷毛目調整の後上位を横ナデ、内面：上半は横位の刷毛目調整の後横ナデ、下半は縦位の篋磨き。胴部上位外面：篋磨き、内面：指頭による押えの後ナデ。	A～D 赤褐色 焼成 普通	口縁部 35%
2	小形壺	口径 (10.8) 現存高 2.3	複合口縁を呈す。器面は荒れている。口縁部外面：横ナデか、内面：刷毛目調整の後横ナデか。	A～D 褐色 焼成 普通	口縁部 35%

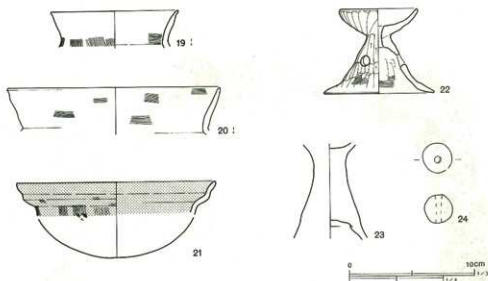
番号	器 種	大きさ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
3	小形壺	口径 (9.6) 現存高 3.3	複合口縁を呈す。複合部外面：下半を指押による粗い押えの後上半を横ナデ、内面：横位の刷毛目調整の後上位を横ナデ。頸部両面：ナデ。	A～E 橙褐色 焼成 普通	口縁部 25%
4	壺	口径 (18.6) 現存高 4.0	器面は荒れている。口縁部外面：縦位の筥磨きの後複合部下端に木口状工具により刻みを施す、内面：縦位の筥磨き。頸部：縦位の筥磨き。	A～E 褐色 焼成 良好	口縁部 15%
5	壺	底径 (9.4) 現存高 3.2	底部はやや突出する。器面は荒れている。両面共にナデか。小礫を含む。	A～E 褐色 焼成 普通	底部 20%
6	壺	底径 7.6 現存高 3.6	底部はやや突出する。胴部下位～底部：外面はナデ、内面は刷毛目調整。	A～D 橙褐色 焼成 普通	底部 100%
7	埴	口径 (16.2) 現存高 6.5	口縁は若干内彎気味に開く。器面は荒れている。口縁部：両面共に縦位の筥磨き。	A～E 褐色 焼成 良好	口縁部 20%
8	S字甕	口径 12.8 現存高 2.9	口縁下段は短かめに大きく外反し、上段は窄まりながら外反する。段部はしっかりしている。口縁部：横ナデ。胴部上位外面：斜位の刷毛目調整、内面：指ナデ様の押え。	A～D 橙褐色 焼成 良好	口縁部 55% 胴部上位 15%
9	S字甕	口径 12.2 現存高 7.2	口縁下段は短かく大きく開き、上段はやや緩やかに外反する。後是非常に明瞭である。口縁部：横ナデ。胴部外面：上位は右から左下へ、中位は左から右下の方向への刷毛目調整、内面：指頭による押え様のナデ。胴部外面に煤が付着。	A～E 橙褐色 焼成 良好	口縁部 55% 胴部上位 15%
10	S字甕	口径 (15.9) 現存高 5.5	口縁下段は大きく外反して開き、上段はやや窄まり気味に外反する。段部はしっかりしている。器面は荒れている。口縁部：横ナデ。胴部上位外面：斜位の刷毛目調整、内面：ナデか。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 20% 胴部上位 25%
11	S字甕	口径 (15.1) 現存高 2.3	口縁下段はほぼ直立し、上段はゆるやかに外反して小さく開く。器面は荒れている。口縁部：横ナデか。口縁部両面に黒斑。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 20%
12	S字甕	口径 (15.1) 現存高 3.1	口縁下段は大きく外反し、上段はゆるやかに外反して開く。器壁はやや厚手である。器面は非常に荒れている。口縁部：横ナデか。胴部外面：刷毛目調整か、内面：指ナデ様の押え。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 25%
13	S字甕	底径 (9.7) 現存高 2.9	端部は折り返しである。器面は荒れている。外面：不明、内面：端部折り返しの後、指頭による押え様のナデ。	A～E 褐色 焼成 普通	脚台部下半 25%
14	S字甕	底径 (8.8) 現存高 3.6	端部内面は折り返しである。器面は荒れている。外面：ナデか、内面：端部付近は折り返しの後指頭による押え、他はナデか。	A～E 褐色 焼成 普通	脚台部下半 20%

番号	品 種	大きさ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
15	S字甕	底径 (8.9) 現存高 3.6	端部内面は折り返しである。器面は非常に荒れている。脚台部外面：不明、内面：ナデ、折り返しは指頭による押え。	A～E 褐色 焼成 普通	脚台部下半 45%
16	S字甕	底径 (9.3) 現存高 3.2	端部内面は折り返しである。器面は荒れている。外面：刷毛目調整を鋸歯状に残していると思われる、内面：端部は折り返しの後指頭による押え、他はナデ。	A～E 褐色 焼成 普通	脚台部下半 15%
17	S字甕	現存高 2.5	器面は非常に荒れている。接合部は砂粒を多く含む粘度を貼付した後、指ナデ様の押え。脚台部外面：刷毛目調整を鋸歯状に残していると思われる。	A～E 褐色 焼成 普通	脚台部上位 95%
18	甕	口径 (10.9) 現存高 2.8	口縁は外反して開く。器面は非常に荒れている。口縁部：横ナデか。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 25%
19	甕	口径 (13.5) 現存高 3.9	口縁は弱く外反して開く。器面は荒れている。口縁部：外面は縦位、内面は横位の刷毛目調整か。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 25%
20	甕	口径 (22.6) 現存高 5.0	口縁部：両面共に横位の刷毛目調整の後横ナデ。胎土は細密。	A～D 黄褐色 焼成 普通	口縁部 25%
21	S字鉢	口径 (15.7) 現存高 2.6	口縁下段は直線気味に開き、上段は緩やかに外反し端部はやや窄まる。器面は荒れている。口縁外面：上段は横位の筥磨きか、下段は刷毛目調整の後横位の筥磨きか、内面：不明。体部外面：刷毛目調整の後横位の筥磨きか、内面：不明。両面共に丹彩。	A～E 赤褐色 焼成 普通	口縁部 10%
22	器 台	口径 (6.2) 底径 (8.8) 器高 6.7	坏部は内彎気味に開く。坏部外面：縦位のやや粗い筥磨き、内面：ナデ。脚台部外面：縦位の刷毛目調整の後縦位の筥磨き、その後下位両面を横ナデ、内面：上位は指ナデ、中位は筥ナデ、下位は横ナデ。胎土は細密である。	A～D 橙褐色 焼成 良好	坏部 35% 脚台部 70%
23	高 坏	現存高 7.5	器面は非常に荒れている。坏下部内面：不明。柱状部外面：不明、内面：ナデか。	A～D 褐色 焼成 普通	柱状部上半 100%

24、土王。ほぼ球形を呈す。褐色。A～D。長さ2.3cm、最大胴径2.4cm、最大孔径0.6cm、重量9.8g。



第25图 1号方形周满墓出土遗物(1)



第26図 1号方形周溝墓出土遺物(2)

2号方形周溝墓 (第14図・45図3～5)

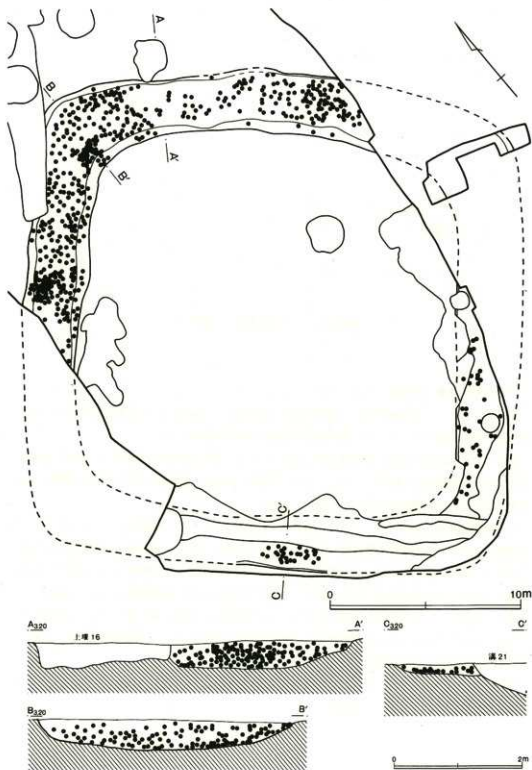
I—14・15グリッドに位置する。遺構上位のほぼ全面を、天地返しによる攪乱を受けているほか西辺の一部も攪乱され、コーナー部分は13号土壌のより切られている。

周溝の最大幅は約1.92m、溝底幅は約0.9m～1.46m、深さは最も深い箇所で約42cmを測るにとどまる。周溝底面は比較的しっかりしており、凹凸も少ない。溝底面の立ち上がりは明確であり、内側の立ち上がりは外側のそれに比べ急といえる。

1号方形周溝墓と同様、コーナーが一箇所のみの検出であること、周溝は直角に交わる二辺のみの調査であることなどから平面規模については不明である。しかし、実測や写真撮影を行なうまでには至らなかったが、コーナーより約9m東にトレンチ掘りを行なった結果、その位置までは周溝が巡っていることが確認されている。また、調査区境界線の土層の断面観察からは、周溝西辺が南へ大きく延びていくようには見受けられなかった。周溝西辺と調査区境界線とが交わる付近が南側コーナーではないかというのが印象である。以上の点から外径約10mの平面規模が想定されることになる。方台部の封土は観察できなかった。

検出し得た遺物は非常に少なく、埴の破片と土玉(第45図3～5)のみにとどまる。

遺物観察表については表13を参照のこと。



第27图 3号方形周溝墓遺物分布图

3号方形周溝墓（第16図・27～30図）

H—17・18、I—16～19、J—17～19グリッドに位置する。全体の4割程が範囲外にあり調査することができなかった。

北側コーナー付近を19号溝に切られ、北東辺の一部は近世によるものと思われる攪乱を受けている。南東辺と南西辺は、地山ともいふべき自然堤防の、丁度落ち込みの部分に位置すると思われ、周溝プランの確認はごく一部にとどまった。なお、前者は11号・12号井戸跡に、後者は10号井戸跡及び、20号・21号溝によって切られている。

二箇所のコーナーと、部分的にはあるが周溝の四辺ともを検出することができ、また遺存度も3基の方形周溝墓中最も良かった。

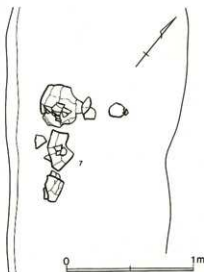
周溝の最大幅は約3.5m、溝底幅は約2.2～2.4m、深さは約50cmを測る。周溝底面はしっかりしており凹凸も少なく、溝底面の立ち上がりも明確である。周溝断面は幅広のU字形を呈すが、概して外側の立ち上がりは、内側のそれに比べ急であるといえる。確認し得た範囲内からは、周溝断面形はほぼ一定であり、土層断面B—B'を典型例として巡ると思われる。

方台部からの封土の流れ込みと考えられる層（第11層）が観察されたほか、コーナー付近では、炭化粒子・焼土粒子を多く含む層（第6・第9層）がみられた。

調査範囲外に設けたトレンチ内においてコーナーが検出されたこと、部分的にはあるが南東辺、南西辺が確認できたことなどから、外径約26.3×26.2m、内径20.1×19.7mのほぼ正方形を呈する平面形が得られた。

検出された遺物のほとんどは細かな破片ばかりであり、接合・復元の可能なものはごく少数にとどまった。周溝の南東辺と南西辺は、遺構の遺存状態が悪いためか、遺物の出土が疎らであるが、北東辺と北西辺についてはまんべんなく分布している。しかしその多くは周溝への流れ込みであると推定される。

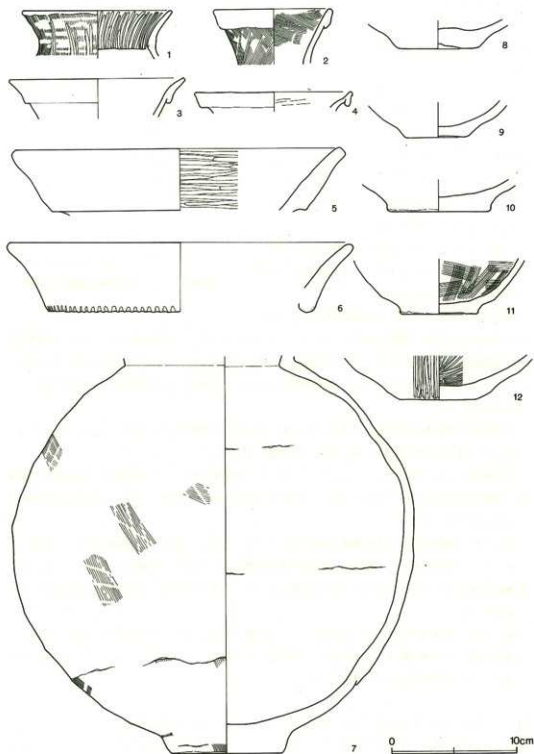
検出された遺物内容は壺・埴・台付甕・S字台付甕・器台・勾玉・切子玉等々である。勾玉は、周溝南東辺の12号井戸跡より30cm程東の、溝底より約10cm上位から出土し、切子玉は、北東辺中央の溝底より20cm程上位において確認された。



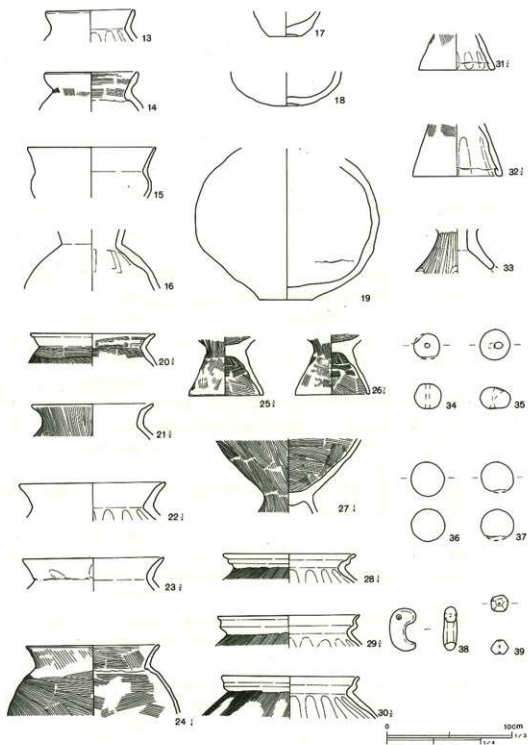
第28図 3号方形周溝墓遺物出土状態

註1 土地所有者である鈴木秀行氏の御好意によりトレンチ掘りをさせて頂いた。

註2 土地所有者である細井松興氏の御好意によりトレンチ掘りをさせて頂いた。



第29图 3号方形周葬墓出土遗物(1)



第30图 3号方形周公墓出土遗物(2)

表6 3号方形周溝墓出土遺物(第29・30図)観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	壺	口径 12.1 現存高 3.8	口縁部は緩やかに外反して開く。口縁部外面:縦位の刷毛目調整の後横ナデ、後粗い縦位の筥磨き、内面:横ナデの後縦位の粗い筥磨き。胎土は細密。	A~D 橙褐色 焼成 普通	口縁部 55%
2	壺	口径 (9.6) 現存高 4.4	口縁は直線気味に開く。口縁部:刷毛目調整の後、複合部外面と内面上部のみを横ナデ。胎土は細密である。	A~D 褐色 焼成 普通	口縁部 20%
3	壺	口径 (14.0) 現存高 3.2	器面は非常に荒れており、両面共に整形不明。Aを多く含む。	A~D 茶褐色 焼成 普通	口縁部 15%
4	壺	口径 (12.6) 現存高 1.6	器面は荒れており整形不明。	A~E 褐色 焼成 普通	口縁部 35%
5	壺	口径 (25.8) 現存高 5.0	器面は荒れている。口縁は直線気味に開く。口縁部外面:不明、内面:横位の筥磨き。3mm程の砂粒を多く含む。内面に黒斑。	A~E 褐色 焼成 良好	口縁部 15%
6	壺	口径 (27.6) 現存高 5.5	口縁部下端に刻み目を一巡させる。器面が荒れているため整形は不明。BとEを多く含む。	A~F 茶褐色 焼成 普通	口縁部 10%
7	壺	胴径 32.0 底径 8.8 現存高 31.5	胴部はほぼ球形を呈し、底部は突出する。器面は非常に荒れている。胴部外面:刷毛目調整の後筥磨きか、内面:ナデか。底部:両面共にナデか。Aを多く含む。	A~E 褐色 焼成 普通	胴部 90% 底部 100%
8	壺	底径 6.3 現存高 2.3	器面は荒れている。胴部外面:不明、内面:ナデ。底部:両面共にナデか。	A~E 褐色 焼成 普通	底部 75%
9	壺	底径 5.4 現存高 2.9	器面は荒れている。胴部外面:不明、内面:ナデ。底部外面:筥削り、内面:ナデ。胴部外面に黒斑。	A~E 褐色 焼成 普通	底部 60%
10	壺	底径 (8.6) 現存高 2.6	底部はやや突出する。胴部外面:ナデ、内面:ナデ。底部外面:粗いナデ、内面:ナデ。胴部外面~底部外面に黒斑。	A~E 橙褐色 焼成 普通	底部 45%
11	壺	底部 6.2 現存高 4.4	底部はやや突出する。器面は荒れている。胴部下位~底部外面:ナデ、内面:粗い刷毛目調整の後ナデか。胎土は細密。	A~D 橙褐色 焼成 普通	胴部下位 45% 底部 50%
12	壺	底径 6.1 現存高 3.5	胴部外面:縦位の筥磨き、内面:筥磨き。底部外面:丁寧なナデ、内面:筥磨き。底部両面に黒斑。胎土は細密である。	A~E 褐色 焼成 良好	底部 70%

番号	器 種	大きさ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
13	埴	口径 (7.1) 現存高 2.5	口縁部外面上端はやや内傾する。口縁部：横ナデ。 胴部外面：ナデ、内面：指頭による押えの後ナデ。 内面は黒色である。	A~D 黒褐色 焼成 良好	口縁部 35%
14	埴	口径 (4.2) 現存高 3.2	器面は荒れている。口縁部外面：横ナデ、内面：刷毛目調整の後横ナデ。	A~E 褐色 焼成 普通	口縁部 25%
15	埴	口径 (10.1) 胴径 (9.6) 現存高 4.0	口縁部は直線的に開く。口径が胴径を上回る。器面は荒れている。口縁部両面：横ナデか。胴部上半両面：ナデか。	A~D 赤褐色 焼成 普通	口縁部 35% 胴部上半 25%
16	埴	現存高 4.9	器面は荒れている。頸部は直立気味に弱く開く。頸部：横ナデか。胴部外面：ナデか、内面：上位を窺ナデの後指ナデ。胎土は細密である。	A~D 白橙色 焼成 普通	胴部上半 25%
17	埴	底径 2.6 現存高 2.0	器面は荒れている。胴部下位：両面ともナデか。	A~E 褐色 焼成 普通	底部 100%
18	埴	底径 (2.4) 現存高 2.7	器面は非常に荒れている。体部外面：ナデか、内面：ナデか。両面共に丹彩。	A~E 赤褐色 焼成 普通	体部下 30%
19	埴	胴径 14.6 底径 4.2 現存高 7.0	最大径を胴部中位にもち平底を呈す。器面は荒れている。外面：整形不明、内面ナデ。	A~D 茶褐色 焼成 普通	胴部 55% 底部 100%
20	甕	口径 (13.2) 現存高 3.5	口縁部内面に弱い凹面をもつ。器面は荒れている。口縁部外面：横ナデ、内面：横位の刷毛目調整の後横ナデ。胴部外面：上端部のみ横位、以下は斜位の刷毛目調整、内面：横位の刷毛目調整の後粗いナデ。	A~E 橙褐色 焼成 普通	口縁部 25%
21	甕	口径 (12.8) 現存高 3.8	口縁は大きく外反して開く。口縁部外面：縦位の刷毛目調整、内面：横ナデか。	A~E 黒褐色 焼成 良好	口縁部 15%
22	甕	口径 (15.4) 現存高 3.4	口縁部は窄まりながら開く。口縁部：横ナデ。胴部上位外面：ナデ、内面：ナデの後指頭による押え。砂粒を非常に多く含む。	A~E 褐色 焼成 良好	口縁部 30%
23	甕	口径 (15.0) 現存部 3.5	口縁は緩く外反して開く。口縁部：横ナデ。外面に一部ナデ付け様の部分を有す。	A~E 暗褐色 焼成 良好	口縁部 15%
24	甕	口径 14.2 現存部 7.2	口縁はゆるく外反して開く。口縁部外面：目の粗い刷毛による斜位の調整の後横ナデ、内面：刷毛目調整の後横ナデ。胴部：横位の刷毛目調整。	A~E 黒褐色	口縁部 65% 胴部上半 40%

番号	器 種	大 き さ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
25	台付甕	底径 8.0 現存高 6.2	底部内面：刷毛目調整。脚台部外面：斜位の刷毛目調整の後粗いナデ、内面：上半は目の細かな刷毛による調整、下半は他の部分と同様の刷毛による横位の調整。	A～E 茶褐色 焼成 良好	脚台部 100%
26	台付甕	底径 4.0 現存高 6.3	底部内面：刷毛目調整。脚台部外面：斜位の刷毛目調整、内面：上半は横位、下半は斜位の刷毛目調整。	A～E 暗褐色 焼成 良好	脚台部 100%
27	台付甕	現存高 7.8	胴部外面：斜位の刷毛目調整、内面：横位を基調とする刷毛目調整。脚台部外面：斜位の刷毛目調整、内面：ナデ。胴部外面、脚台部内面に黒斑。	A～E 黒褐色 焼成 普通	胴部下位 25%
28	S字甕	口径 (14.2) 現存高 3.0	口縁内面の段は弱く、口縁端部はやや肥厚する。器面は荒れている。口縁部：横ナデ。胴部外面：斜位の刷毛目調整、内面：指頭による押え様のナデ。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 15%
29	S字甕	口径 (15.2) 現存高 3.3	口縁部下段内面に面をもつ。口縁部：横ナデ。胴部外面：斜位の刷毛目調整、内面：指頭による押え様のナデ。外面は全体に煤が付着している。	A～D 黒褐色 焼成 良好	口縁部 25%
30	S字甕	口径 (14.6) 現存高 4.4	口縁上段は弱く外反し、端部はやや肥厚する。器面は非常に荒れている。口縁部：横ナデ。胴部外面：斜位の刷毛目調整、内面：指頭による押え様のナデ。外面には煤が付着している。	A～E 黒褐色 焼成 普通	口縁部 20%
31	S字甕	底径 (8.0) 現存高 3.9	器面は荒れている。脚台部外面：刷毛目調整を鋸歯状に残す、内面：ナデの後、下位を指頭による押え様のナデ。	A～E 褐色 焼成 普通	脚台部下半15%
32	S字甕	底径 (9.4) 現存高 5.5	器面は荒れている。脚台部外面：刷毛目調整を鋸歯状に残すと思われる、内面：指頭による押え様のナデ。	A～E 茶褐色 焼成 普通	脚台部 15%
33	器 台	現存高 3.5	脚台部外面：縦位の篋磨き、内面：ナデ。裾部に4孔を有すると思われる。外面、孔内面に丹彩。	A～E 赤褐色 焼成 良好	脚台部上半75%

34、土王。ほぼ球形を呈し、孔は直線状である。褐色。A～D。長さ2.0cm、最大胴径2.1cm、最大孔径0.3cm、現存重量6.3g。

35、土王。断面形はやや歪な楕円形を呈す。周溝底面直上より出土。橙褐色。A～D。長さ1.7cm、最大胴径2.4cm、最大孔径0.6cm、重量8.1g。

36、土王。ほぼ球形を呈すが孔をもたない。周溝底面直上より出土。橙褐色。A～D。長さ・最大胴径2.7cm、重量15.0g。

37、土玉。ほぼ球形を呈すと思われるが、孔をもたない。橙褐色。長さ・最大胴径2.6cm、現存重量12.4g。

38、勾玉。一部欠損するが概ね遺存状態は良好である。形状は「コ」字状を呈し、断面形はやや扁平な楕円形。穿孔は一方向から行なった後、反対側から孔を拡げる。乳褐色。メノウ製。長さ3.4cm、最大幅1.1cm、最大孔径0.4cm、現存重量9.0g。

39、切子玉。遺存状態は概ね良好である。平面形は歪んだ五角形、断面形はソロバン玉状を呈す。穿孔は一方向から行なった後、反対側から孔を拡げている。明赤褐色。メノウ製。長さ1.1cm、最大幅1.4cm、最大孔径0.1cm、重量2.3g。

(2) 土壌・ビット

本遺跡から検出された、古墳時代に属すると考えられる土壌は8基、ビットは2基であり、いずれもC区において確認された。5号・15号・16号土壌を除いて、図化できる遺物は出土していない。

2号土壌 (第18図)

G-12グリッドに位置する。一部を5号溝により切られているが、遺存状態は比較的良好である。規模は1.9×1.0mの長方形に近い平面形態を呈し、深さは約40cmを測る。底面は平坦で、立ち上がりはしっかりしている。性格は不明である。

図化し得る遺物は皆無であるが、五領式期に属すと思われる土器片が10点出土している。

1層：黄褐色土 2層：黒褐色土 3層：黒色土 4層：黄褐色土 5層：黒色土 砂粒を含む

4号土壌 (第18図)

H-12グリッドに位置する。東側を一部7号溝によって切られているが、遺存状態は比較的良好といえる。規模は径約60cmの円形を呈すと思われ、深さは約40cmを測る。底面からの立ち上がりはしっかりしている。性格は不明である。五領式とみられる土器片が3点出土しているが、図化し得るものはなかった。性格は不明である。

1層：黒褐色土 2層：暗褐色土 3層：黒褐色土 ローム粒を含む

5号土壌 (第18図・45図1)

H-12グリッドに位置する。東西を5号・6号溝によって切られ、原形を知ることはできない。規模は、切られていない箇所約50cm、深さは約10cmである。現平面形・断面形からみて、東西に延びる溝の可能性もある。

出土遺物は一団体のみであるが、破片はまとまった状態で検出された。遺構の性格は不明である。なお、遺物観察表については、表13を参照のこと。

6号土墳 (第18図)

H-13グリッドに位置する。南側を一部ビット風の窪地に攪乱されている。規模は約2.2×0.9mの不整長楕円形を呈し、深さは50cmを測る。底面は概ね平坦であるが、立ち上がりが浅く、土墳としてのプランは不明瞭である。

五領式のものと思われる土器片が4点出土しているが、図化し得るものは含まれていない。

1層：暗褐色土 ローム粒を含む 2層：黒褐色土 3層：暗黄褐色土 4層：黒褐色土 ローム粒を含む 5層：暗褐色土 6層：黄褐色土

9号土墳 (第18図)

H-14グリッドに位置する。北側は攪乱され、南側は14号溝に、西側は9号井戸跡によって切られており、平面的な遺存状態は悪い。規模は約1.6m程の、円形に近いものと思われる。深さは約90cmを測る。平坦な底面から、直線的に急激な立ち上がりを示す。

五領式のものと思われる、台付甕や壺の破片が出土しているが、図化し得る遺物は皆無であった。

12号土墳 (第18図)

I-14グリッドに位置する。北側を17号溝によって切られ、東側は調査範囲外に達している。12号土墳付近では、1号方形周溝墓の周溝の立ち上がりが消えてしまっているため、両者の新旧関係は不明である。平面規模は不明、深さは10cmにとどまる。平坦な底面からの立ち上がりは浅く不明瞭である。性格は不明。

五領式期に属すとみられる、台付甕や壺の破片が検出されていたが、図化し得るものは含まれていない。

15号土墳 (第18図・45図2)

H-17グリッドに位置する。東側の一部を攪乱されているが、遺存状態は比較的良好である。規模は約1.0mの不整円形を呈し、深さは25cmを測る。底面は平坦に近いが、中央寄りの箇所に窪みの部分がある。

ほぼ完形の小形丸底埴 (第45図) が口縁部を下に向けた状態で検出されたほか、図化し得なかったが、土器片が9点出土している。遺構の性格は不明。

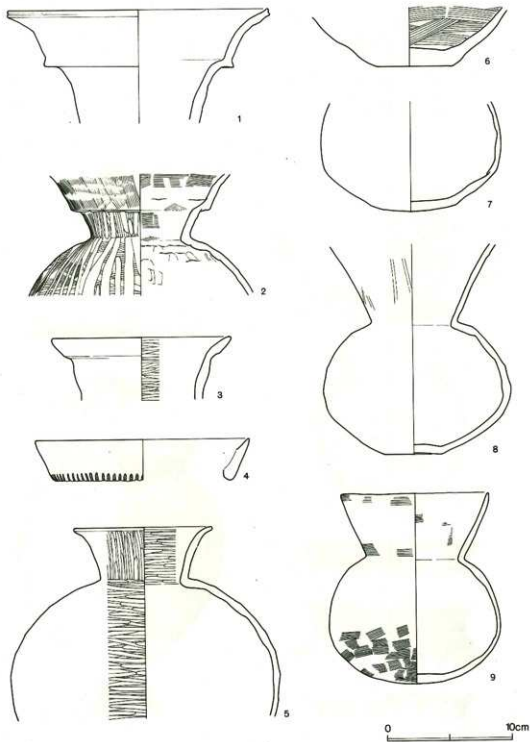
1層：暗褐色土 2層：暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。3層：黄褐色土 ローム崩落土。

なお、遺物観察表については、表13を参照のこと。

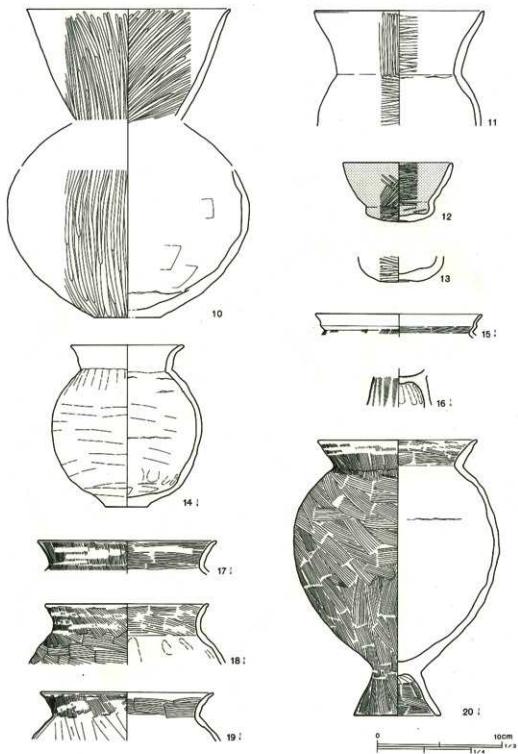
18号土墳 (第18図・31～33図)

J-17～18グリッドにまたがって位置する。遺存状態は良好である。規模は約2.4×2.1mの不整楕円形を呈し、深さは約1.2mを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がるが、東側はやや屈曲する。平面の形状から推して、一度掘り返されている可能性も否定できない。

多くの遺物が出土しているがその内容としては壺・埴・甕・台付甕・S字甕・器台・高坏・鉢・



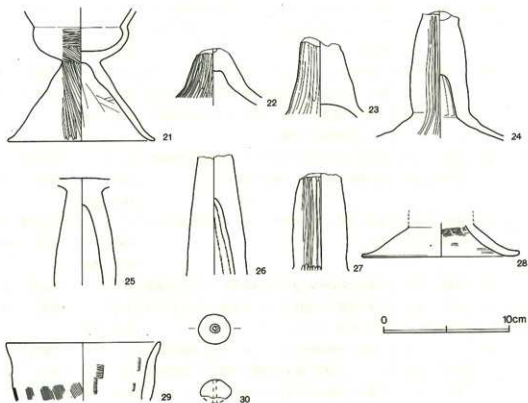
第31圖 18号土壙出土遺物(1)



第32図 18号土坑出土遺物(2)

土玉等々が挙げられ、その多くは部分もしくは破片のみにとどまる。なお、以上の遺物の他に貝塚穴痕泥岩と考えられるものが、図化した2点（第55図）のほか、小片を合わせ計5点検出された。祭祀に伴う遺構と推定される。

1層：褐色土 ローム・ブロック、黒色土ブロックを含む 2層：黒褐色土 ローム粒子、黒色土粒子を含む 3層：黒色土 炭化物を多量に含む 4層：黒褐色土 炭化粒子・焼土粒子を多量に含む。5層：炭層 6層：焼土層 7層：暗褐色土 炭化物、焼土粒子を多量に含む。8層：黒褐色土 7層に類似 9層：砂層 地山の崩落土である。



第33図 18号土坑出土遺物(3)

表7 18号土坑出土遺物（第31～33図）観察表

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	壺	口径 (20.9) 現存高 8.9	二重口縁を呈す。口縁端部は弱い凹面を呈す。口縁部 両面：横ナデ。頸部両面：ナデか。	A～E 黄橙色 焼成 普通	口縁部 15%

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	壺	現存高 9.5	二重口縁を呈す。口縁部：外面斜位、内面横位の刷毛目調整の後横ナデ。頸部：外面は縦位の刷毛目調整の後縦位の寛磨き、内面は横位の刷毛目調整の後ナデ。胴部上位：外面は斜位と横位の刷毛目調整の後縦位の粗い寛磨き、内面は寛ナデの後指ナデ。	A~D 橙褐色 焼成 良好	口縁部 75% 頸部 100% 胴部上位 70%
3	壺	口径 (14.3) 現存高 5.0	器面外側は非常に荒れている。口縁部外面：整形不明、内面：横位の寛磨き。胎土は比較的細密である。	A~E 赤褐色 焼成 普通	口縁部 35%
4	壺	口径 (17.1) 現存高 3.3	頸部との接合部で割れている。口縁部外下端に刻み目をもつ。器面は荒れており、両面とも整形不明。Bを多く含む。	A~E 橙褐色 焼成 普通	口縁部 30%
5	壺	口径 (10.9) 胴径 21.5 現存高 15.0	口縁はゆるく外反して開く。器面は荒れている。口縁部：外面は縦位、内面は横位の寛磨き。胴部外面：横位の寛磨き、内面：丁寧なナデ。胎土は細密である。胴部外面に黒斑。	A~D 褐色 焼成 普通	口縁部 20% 胴部上半 60%
6	壺	底径 5.1 現存高 4.6	平底を呈す。器面は荒れている。胴部下位~底部外面：整形不明、内面：刷毛目調整。	A~E 褐色 焼成 普通	胴部下位 65% 底部 100%
7	埴	胴径 (14.4) 現存高 8.6	丸底を呈す。器面は荒れている。両面共に横位のナデか。	A~E 褐色 焼成 普通	胴部下半 30% 底部 100%
8	埴	胴径 15.0 底径 4.6 現存高 15.5	口縁部は直線的に開く。器面は荒れている。口縁部外面：寛磨きの後横ナデか、内面横ナデか。胴部内外面・底部：ナデか。	A~E 茶褐色 焼成 普通	口縁部 60% 体部 100%
9	埴	口径 11.8 胴径 13.8 器高 15.0	口縁部は内彎気味に開く。丸底である。器面は荒れている。口縁部：刷毛目調整の後横ナデ。胴部外面：刷毛目調整の後上半のみナデか、内面：ナデか。胎土は細密である。	A~D 褐色 焼成 普通	口縁部 95% 体部 80%
10	埴	口径 (16.2) 胴径 (19.3) 底径 (5.2) 器高 (24.4)	口縁部はやや内彎気味に開く。口縁部：外面は縦位、内面は斜位の寛磨き。胴部外面：縦位の寛磨き、内面：ナデ、一部寛ナデ。底部：ナデ。	A~E 褐色 焼成 良好	口縁部 30% 胴部 30% 底部 25%
11	埴	口径 (13.4) 現存高 9.1	口縁部は大きく開き、口径が僅かに胴径を凌ぐ。口縁部外面：縦位の丁寧な寛磨き、内面：横位の粗い寛磨き、後両面を横ナデ。胴部外面：横位の粗い寛磨き、内面ナデ。	A~D 茶褐色 焼成 良好	口縁部 20% 胴部 10%
12	埴	口径 8.8	口縁部やや内彎気味に開く。口縁部：横ナデの後斜	A~D	口縁部 55%

番号	器 種	大きさ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
13	罎	底径 1.9	位の寛磨き。体部外面：横位の寛磨き、内面：ナデ。	赤色	体部 95%
		器高 4.7	全体に丹彩。胎土は細密。	焼成 良好	
		底径 2.5	整形は丁寧である。胴部下位～底部外面：横位の寛	A～D	胴部下位 80%
		現存高 2.0	磨き、内面ナデ。	褐色	底部 100%
14	甕	口径 (12.0)	口縁部は外反して開く。平底を呈す。器面は荒れて	焼成 良好	
		胴径 (16.0)	いる。口縁部：横ナデ。胴部外面：上位は縦位、中	A～E	口縁部 30%
		底径 4.4	～下位は横位の寛磨りか、内面：寛磨りの後ナデか。	橙褐色	胴部 45%
		器高 17.0	底部外面：ナデ、内面：寛磨りの後ナデ。黒斑あり。	焼成 普通	底部 100%
15	S字甕	口径 (17.6)	口縁は上段・下段ともゆるく外反して開く。器面は	A～E	口縁部 20%
		現存高 2.5	荒れている。口縁部：内面下段を横位の刷毛目調整	褐色	
16	S字甕	現存高 4.0	の後横ナデか。	焼成 普通	
			底部内面：接合部に砂粒を多く含む粘土を貼付。脚	A～E	脚台部上半
17	甕	口径 (19.1)	台部外面：刷毛目調整を鋸歯状に残す、内面：指頭	褐色	80%
		現存高 3.5	による押え。接合部に砂粒を多く含む粘土を貼付。	焼成 普通	
			口縁は外反して開く。口縁部：外面は縦位、内面は	A～E	口縁部 20%
			横位の刷毛目調整の後、粗い横ナデ。	褐色	
18	台付甕	口径 (17.4)	口縁部は外反して開く。口縁部：外面は斜位、内面	焼成 普通	
		現存高 6.4	は横位の刷毛目調整、後両面を横ナデ。胴部上位外	A～D	口縁部 20%
			面：斜位と横位の刷毛目調整、内面ナデ。	茶褐色	胴部上位 30%
			口縁部：外面斜位、内面横位の刷毛目調整の後両面	焼成 良好	
19	台付甕	口径 (18.4)	横ナデ。胴部外面：寛磨り、内面ナデ。口縁部外面	A～E	口縁部 15%
		現存高 5.1	に黒斑。	茶褐色	胴部上位 10%
20	台付甕	口径 16.8	口縁部は「く」字状に大きく開く。口縁部：外面を	焼成 普通	
		胴径 21.9	斜位、内面を横位の刷毛目調整の後、上半のみを横	A～E	口縁部 80%
		底径 9.2	ナデ。胴部外面：上半を斜位、下半を縦位の刷毛目	黒褐色	胴部 55%
		器高 29.2	調整、内面ナデ。脚台部外面：縦位と斜位の刷毛目	焼成 良好	脚台部 100%
21	高 杯	現存高 10.5	調整、内面：上位は寛磨り、中～下位は横位の刷毛		
		底部 11.8	目調整。胴部外面全体に煤が付着している。	A～D	口縁部 10%
			口縁部、脚部共に直線的に開く。器面は全体に荒れ	赤褐色	体部 45%
			ている。口縁寛磨きか。体部外面：上位は横位、下	焼成 普通	脚部 90%
22	高 杯	現存高 6.4	位は斜位の寛磨き、内面：不明。脚部外面：縦位の		
			寛磨き、内面：下位は横ナデか、他は寛ナデ。整形	A～E	脚台部上半
			は丁寧である。	褐色	70%

番号	器 種	大きさ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
23	高 杯	現存高 4.4	脚台部外面：縦位の篋磨き、内面：ナデ。胎土は細密である。	焼成 普通 褐色	脚台部 35 %
24	高 杯	現存高 10.2	裾部は「八」字に開く。柱状部・裾部外面：縦位の篋磨き、柱状部内面：篋削り、裾部内面：不明。	焼成 普通 A～E 橙褐色	脚部 100 % 裾部 15 %
25	高 杯	現存高 8.4	杯部内面は平底を呈す。器面は荒れている。杯部下位両面：不明。脚部外面：篋磨き、内面ナデか。	焼成 普通 A～D 赤褐色	脚部 35 %
26	高 杯	現存高 9.6	器面は非常に荒れている。柱状部外面：不明、内面：絞りか。	焼成 普通 A～D 橙褐色	柱状部 95 %
27	高 杯	現存高 8.1	柱状部外面：篋磨き、内面ナデ	焼成 普通 A～D 赤褐色	脚部 100 %
28	高 杯	底径 12.6 現存高 2.6	柱状部は棒状と思われる。裾部外面：丁寧な横ナデ、内面：横位を基調とする刷毛目調整の後下半を横ナデ。胎土は細密。	焼成 普通 A～D 黄褐色	裾部 70 %
29	鉢	口径 (12.3) 現存高 4.7	口縁部：外面斜位、内面横位の刷毛目調整の後丁寧なナデ。後、上位のみを横ナデ、整形は丁寧。胎土は細密である。	焼成 良好 A～E 橙褐色	口縁部 20 %

30、土玉。一部を欠損するが、断面形はソロバン玉状に近い。黒褐色。A～E。推足長さ1.8cm、最大胴径2.6cm、最大孔径0.5cm、現存重量5.9g。

1号ビット (第18図)

H-12グリッドに位置する。西側を7号溝によって切られている。規模は径約0.4mの円形を呈すと思われ、深さは約30cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がり、遺存状態も比較的良好といえる。性格は不明である。五領式期に属すとみられる土器片が2点検出されているが、図化し得るほどのものではなかった。

1層：黒褐色土 2層：暗褐色土

2号ビット (第18図)

G-13グリッドに位置する。規模は径約40cmの不整円形を呈し、深さは約40cmを測る。丸味を帯びた底面からほぼ垂直に立ち上がり、遺存状態も比較的良好である。性格は不明。五領式期と見做し得る土器片が3点確認されたが、図化し得るものではなかった。

1層：灰黒褐色土 2層：黒褐色土 3層：黒色土

(3) 溝

本遺跡から検出されている、古墳時代のものと考えられる溝は5条であり、いずれもC区のみからの検出である。

1号溝 (第11図・34図・35図)

G-11グリッドに位置する。東側で溝は止まり、西側は調査範囲外に延びる。規模は上幅約1.2m、底幅1.1m、深さ約30cmを測り、長さは約9.1mまでを確認した。底面はゆるやかに窪み、直線的な立ち上りは明瞭である。遺存状態は比較的良好といえる。

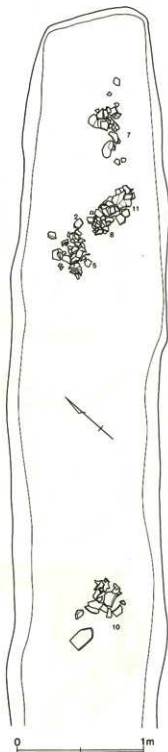
遺物としては壺・埴・甕・S字台付甕・高杯・器台等が、溝底より約20～30cm程上位から、ある程度まとまった状態で出土した。第35図11のS字台付甕は土器片が集中してみられたが、3号溝の溝底上30cm程の位置から検出された破片と接合している。この事実から、1号溝・3号溝おのおのは、溝または窪みとして同時に存在していた時期があると推定される。なお、土器類以外の遺物として、貝巢穴痕泥岩と考えられるものが2点検出されている。一方は約3.0×1.5×1.0cm、他方は約2.0×1.5×1.0cmであり、前者のみを図化した(図55図1)。

1号溝と3号溝の位置関係はほぼ直角であり、方位的にみれば18号溝のそれとは対応している。18号溝とは異なり一部分途切れはするが、L字状を呈す同一遺溝の可能性をも推定させる。

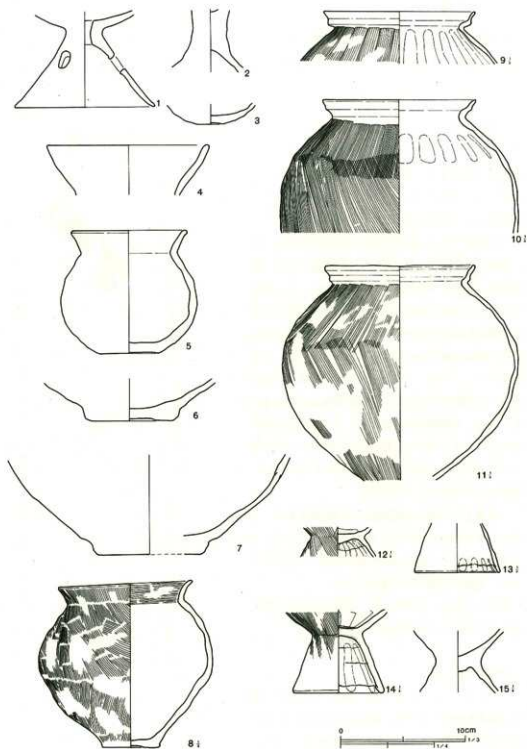
なおこの他に、2号溝と同一遺溝であるとの考え方もできるが、その性格は不明である。

2号溝 (第11図)

G-11グリッドに位置する。西側で止まるが、東側は調査範囲外に延びる。確認部分が小さいためその平面形は不明であり、土壌の可能性も考えられる。規模は上幅約80cm、底幅約70cm、深さ約30cmを測る。底面は僅かに窪み、立ち上がりも明瞭であり、遺存



第34図 1号溝遺物出土状態



第35圖 1号溝出土遺物

表8 1号清出土遺物(第35図)観察表

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	器台	底径 (10.4) 現存高 12.5	裾部に3孔をもつ。器面は荒れている。全面共に整形は不明。	A~D 茶褐色 焼成 普通	坏下部・脚台部 80%
2	高杯	現存高 5.1	器面は非常に荒れている。柱状部外面：縦位の範磨きか、内面：ナデか。	A~E 褐色 焼成 普通	柱状部上半 100%
3	埴	底径 2.0 現存高 1.7	器面は非常に荒れている。胴部外面：不明、内面：ナデか。底部・両面共にナデか。	A~E 赤褐色 焼成 普通	底部 100%
4	埴	口径 (13.0) 現存高 5.0	口縁は内彎気味に開く。器面が非常に荒れているため整形不明。	A~D 褐色 焼成 普通	口縁部 25%
5	埴	口径 9.1 胴径 10.8 底径 (4.9) 器高 9.7	口縁部は直線気味に開く。器面は非常に荒れている。口縁部：横ナデか。胴部：両面共にナデか。底部：両面共にナデか。胎土は非常に細密である。口縁部外面に黒斑。	A~E 褐色 焼成 普通	口縁部 70% 胴部 20% 底部 45%
6	壺	底径 6.6 現存高 3.3	底部に粘土をドーナツ状に貼付している。器面は非常に荒れているため整形不明。外面に黒斑。	A~E 橙褐色 焼成 普通	底部 100%
7	壺	底径 (8.0) 現存高 7.7	底部はやや突出する。器面は荒れている。胴部外面：不明、内面：ナデか。底部：両面共にナデか。	A~E 赤褐色 焼成 普通	胴部下半 70% 底部 10%
8	甕	口径 13.6 胴径 18.7 底径 6.2 器高 17.4	底部はドーナツ状に粘土を貼付する。器面は荒れている。口縁部：外面は斜位、内面は横位の刷毛目調整。胴部外面：斜位の刷毛目調整、内面：ナデか。底部：ナデ。胎土は細密である。	A~D 褐色 焼成 普通	口縁部 30% 胴部 75% 底部 80%
9	S字甕	口径 (16.2) 現存高 5.4	口縁下段は大きく外反し、上段は緩やかに立ち上り気味に開いて端部でやや肥厚する。器面は荒れている。口縁部：横ナデ。胴部外面：斜位の刷毛目調整、内面：指ナデ様の押え。A・Bを多く含む。	A~E 褐色 焼成 普通	口縁部 40% 胴部上位 20%
10	S字甕	口径 16.2 胴径 (25.5) 現存高 14.0	口縁下段は緩やかに外反し、上段は窄まりながら大きく外反して開く。口縁部：横ナデによって段を設けている。胴部外面：上位は右から左下へ、中位は左から右下の方向に刷毛目調整、内面：上位は指ナデ様の押え、下位はナデ。胴部外面に煤が付着。	A~D 褐色 焼成 普通	口縁部 90% 胴部上半 45%

番号	器 種	大きさ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴		備 考
11	S字甕	口径 15.9 胴径 (25.0) 現存高 22.9	口縁下段は短かく開く、上段は緩やかに外反する。 器面は非常に荒れている。口縁部：横ナデによって 段を施けている。胴部外面：上位は右から左下へ、 中～下位は左から右下の方向に刷毛目調整、内面： ナデ。	A～E 橙褐色 焼成 普通	口縁部 70 % 胴部 40 %
12	S字甕	現存高 3.1	接合部の上面と下面に、砂粒を多く含む粘土を貼付 している。胴部下位～脚台部外面：刷毛目調整。底 部内面：ナデか。脚台部内面：指頭による押え様の ナデ。	A～E 褐色 焼成 普通	接合部 100 %
13	S字甕	底径 9.2 現存高 5.2	端部内面は折り返してある。器面は非常に荒れてい る。脚台部外面：ナデ、内面：端部付近は指頭によ る押え、他はナデ。砂粒を多く含む。	A～D 褐色 焼成 普通	脚台部 70 %
14	S字甕	底径 9.6 現存高 8.8	端部内面は折り返しである。器面は荒れている。底 部：接合部に砂粒を多く含む粘土を貼付した後、内 面は篋削り、外面は指ナデ様の押え。脚台部外面： 刷毛目調整を鋸歯状に残す、内面：端部折り返しの 後指ナデ様の押え。A・Bを多く含む。	A～E 褐色(黒色) 焼成 普通	脚台部 100 %
15	台付甕	現存高 6.8	器面は荒れている。胴部外面：不明、内面：ナデか。 脚台部外面：不明、内面：ナデか。	A～E 褐色 焼成 普通	胴部下位 60 % 脚台部上位 50 %

状態は比較的良好といえる。

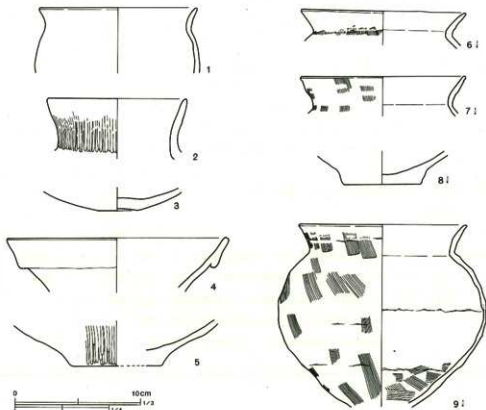
遺物は、古墳時代前期（五領式期）と考えられる土器片1点のみであり、図化することはできなかった。1号溝と同一遺構の可能性もあるが、その性格は不明である。

3号溝（第11図・36図）

G-11グリッドに位置する。北側で溝は止まり、南側は調査範囲外に延びる。規模は上幅約70cm、底幅約50cm、深さ約35cmを測り、長さは約4.9mまでを確認した。僅かに窪む底面からの直線的な立ち上がりは明瞭である。遺存状態は比較的良好といえる。

出土した遺物には壺・埴・埴・甕等があり、溝底より10～20cm程の位置において、散在する状態で確認された。

遺構としての性格は不明であるが、1号溝と同一遺構の可能性も窺わせる。



第36図 3号溝出土遺物

表9 3号溝出土遺物（第36図）観察表

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	埴	口径 (12.6) 現存高 5.2	口縁は弱く開く。器面が荒れているため整形不明。	A～E 橙褐色 焼成 普通	口縁部 10 % 胴部上半 25 %
2	埴	口径 (11.2) 現存高 4.8	器面は非常に荒れている。口縁部外面：縦位の寛磨き、内面：不明。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 15 %
3	埴	底径 3.2 現存高 1.8	器面は荒れている。外面：ナデか、内面：ナデ。	A～E 褐色 焼成 普通	底部 100 %
4	壺	口径 (17.4) 現存高 4.2	口縁は内彎気味に開く。器面が荒れているため整形不明。	A～E 橙褐色 焼成 普通	口縁部 20 %
5	壺	底径 (3.7)	胴部下位外面：縦位の寛磨き、内面：ナデ。底部：	A～D	胴部下位 25 %

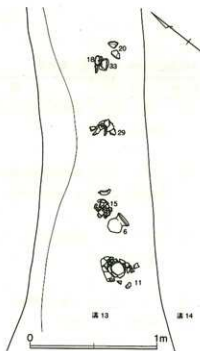
番号	器 種	大 き さ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
6	甕	現存高 3.6	ナデ。胎土は細密。内面は褐色。	黒色 焼成 良好	底部 15%
		口径 17.4	口縁部は緩く外反して開く。器面は荒れている。口	A~E	口縁部 25%
		現存高 3.8	縁部：横ナデか。胴部外面：刷毛目調整、内面：ナ	橙褐色	
7	甕	口径 (17.2)	器面は非常に荒れている。口縁は直線的に開く。口	焼成 普通	口縁部 25%
		現存高 4.2	縁部外面：縦位の刷毛目調整の後横ナデか、内面：	A~C+E	
			横ナデ。	暗褐色	
8	甕	底径 (8.4)	底部は突出する。器面は荒れている。底部ナデ。	焼成 普通	底部 45%
		現存高 3.5		A~E	
				黒褐色	
9	台付甕	口径 (18.0)	口縁部は外反気味に開く。器面は荒れている。口縁	焼成 普通	口縁部 45%
		胴径 22.2	部外面：斜位の刷毛目調整の後横ナデ、内面：横ナ	A~E	胴部 65%
		現存高 19.2	デ。胴部外面：斜位を基調とする刷毛目調整、内面	黒褐色	
			：上~中位はナデ、下位は横位の刷毛目調整。胴部	焼成 普通	
			外面中位には煤が付着し、下位は熱のため赤色化し		
			ている。		

13号溝 (第12図・37~40図)

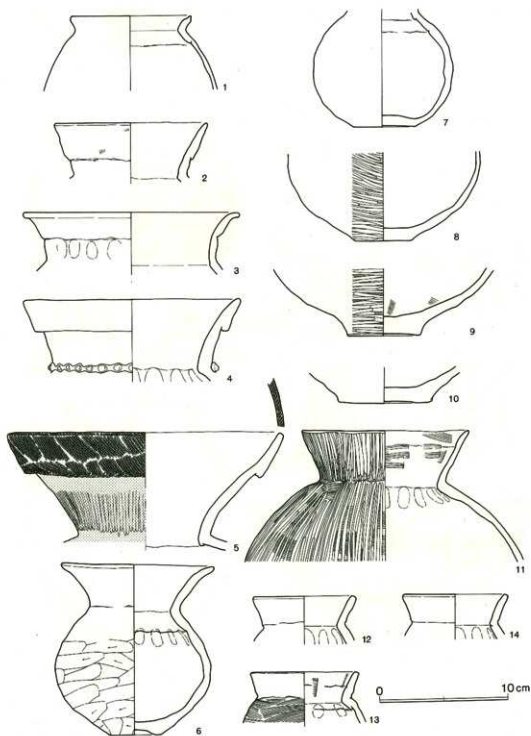
1—13—H—13・14グリッドにかけて位置する。南西側は、不明瞭ではあるが溝は止まっており、北東側は調査範囲外に延びる。溝の南半分は、14号溝によって切られており、遺構としての規模・平面形は不明瞭である。確認できる範囲内での最大幅は約1.6m、底幅は約1.5m、深さは約25cm、長さは約16.2mである。ゆるやかに窪むと思われる底面からの立ち上がりは明瞭であり、断面形は幅広のU字形が推定される。

出土した遺物には、壺・埴・高杯・器台・甗・小形甕・台付甕・S字台付甕等がある。各個体の破片は比較的分散してはならず、レベル的にみても、底面から約6~20cmの範囲内に集中して確認された。

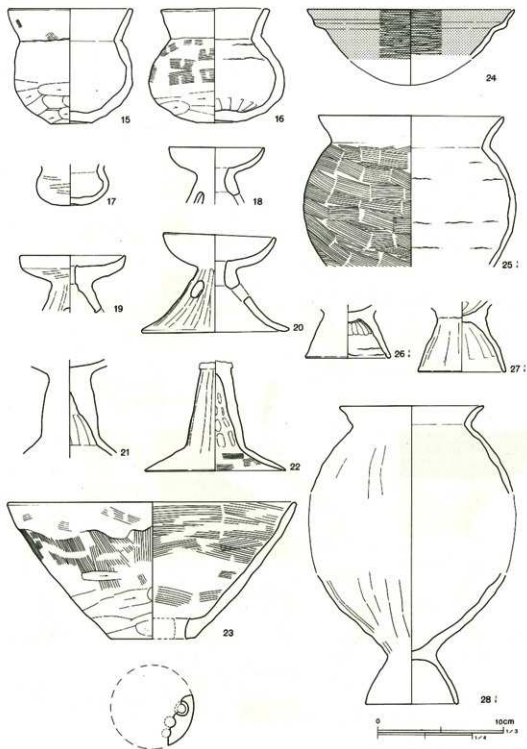
遺構の性格は不明である。しかし、13号溝の形状・位置関係からみて (第12図参照)、1号方形周溝墓



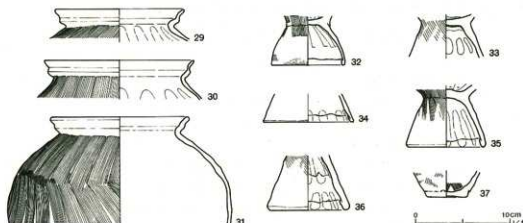
第37図 13号溝遺物出土状態



第38图 13号溝出土遺物(1)



第39圖 13号溝出土遺物(2)



第40図 13号溝出土遺物(3)

の北西側の周溝部分に該当するという可能性も否定しきれない。なお、13号溝と1号方形周溝溝底との溝底のレベル差は20cm前後である。

土器類以外に、不明確ではあるが、貝巢穴痕泥岩と考えられる小片が2点確認されている。2点の合計重量は11.8gである。しかし、貝巢穴が不明瞭のため図化は差し控えた。

表10 13号溝出土遺物(第38～40図)観察表

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	埴	口径 (9.6) 胴径 (14.0) 現存高 8.6	口縁は短かく外反し、端部は窄まりながら立ち上がる。器面は荒れている。口縁部：横ナデか。胴部：両面共にナデ。胎土は細密である。	A～D 褐色 焼成 普通	口縁部・胴部上 位 25%
2	壺	口径 (12.2) 現存高 4.7	複合口縁を呈す。器面は非常に荒れている。複合部外面：刷毛目調整の後横ナデか、内面：横ナデか。頸部外面：刷毛目調整の後ナデか。砂粒を多く含む。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 45%
3	壺	口径 (17.2) 現存高 4.9	口縁部下半はほぼ直立し、上半はゆるやかに外反して開く。口縁部外面：下半を部分的に指頭による押えを行ない、後全体を横ナデ、内面：横ナデ。	A～E 茶褐色 焼成 普通	口縁部 30%
4	壺	口径 (17.1) 現存高 6.5	頸部下端に粘土紐を一巡させた後指頭で押圧して凹ませている。器面は非常に荒れている。口縁部：横ナデか。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 15%
5	壺	口径 11.4 現存高 9.3	器面は荒れている。複合部外面にR Lの縄文を充填する。以下は縦位の寛磨き。内面：横位の寛磨き。外面に丹彩。胎土は細密である。	A～D 赤褐色 焼成 普通	口縁部 95%
6	小形壺	口径 12.2 胴径 12.4 底径 4.1 器高 13.7	口縁部はゆるやかに外反して開く。揚げ底を呈す。器面は荒れている。口縁部：横ナデか。胴部外面：上半はナデか、下半は横位の寛削り、内面：上位は接合部分を指頭による押え、下半はナデ。底部：両面ともナデ。	A～D 褐色 焼成 普通	80% 100% 100%

番号	器 種	大 き さ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
7	小形壺	胴径 11.1	胴部はやや下膨れである。器面は荒れている。胴部	A～E	胴部 50%
		底径 (5.0)	外面：不明、内面：ナデか。底部両面：ナデか。胴	茶褐色	底部 40%
		現存高 9.4	部内外面に黒斑。	焼成 普通	
8	壺	胴径 (15.4)	胴部外面：横位の寛磨き、内面：丁寧なナデ。底部	A～D	胴部下半 40%
		底径 4.5	外面：寛磨きか、内面：丁寧なナデ。外面：胴部～	茶褐色	底部 100%
		現存高 7.0	底部に丹彩。胎土は細密である。	焼成 良好	
9	壺	底径 5.8	底部はやや突出する。胴部外面：刷毛目調整の後横	A～E	胴部下位 20%
		現存高 5.4	位を基調とする寛磨き。胴部～底部内面：刷毛目調	黒褐色	底部 95%
			整の後ナデ。底部外面：寛削りの後ナデ。胎土は細	焼成 良好	
10	壺	底径 7.4	密。		
		現存高 2.9	底部はやや突出し、木葉痕を有す。器面は非常に荒	A～E	底部 95%
			れている。両面共にナデか。Aを多く含む。	褐色	
11	壺	口径 13.4	口縁部は直線気味に「く」字に開く。口縁部外面：	焼成 普通	
		現存高 10.4	縦位の刷毛目調整の後縦位の粗い寛磨き、内面：横	A～D	口縁部 100%
			位の粗い刷毛目調整の後寛磨きか。胴部外面：横位	褐色	胴部上位 70%
12	埴	口径 (8.2)	の刷毛目調整の後縦位の粗い寛磨き。胴部外面に黒	焼成 良好	
		現存高 3.5	斑。胎土は細密。		
			口縁は直線的に開く。口縁部：横ナデ。胴部：両面	A～E	口縁部 30%
13	埴	口径 8.6	共にナデ。3mm程の砂粒を多く含む。	褐色	
		現存高 4.0	口縁部はほぼ直線的に開き、端部に平担面をもつ。	焼成 良好	
			口縁部外面：横ナデ、内面：粗い刷毛目調整の後横	A～E	口縁部 70%
14	埴	口径 (8.4)	ナデか。胴部上位外面：横位の刷毛目調整、内面：	橙褐色	胴部上位 15%
		現存高 3.6	ナデの後上位を指頭による粗い押え。	焼成 良好	
			口縁部は直線的に開く。口縁部：横ナデ。胴部外面	A～E	口縁部 25%
15	埴	口径 10.0	ナデ、内面：指頭による押えの後ナデ。砂粒を多く	褐色	
		胴径 10.3	含む。	焼成 普通	
		底径 3.3	口縁端部に弱い面をもつ。口縁部外面：刷毛目調整	A～E	口縁部 75%
16	埴	器高 9.1	の後横ナデ、内面：横ナデ。胴部外面：上半はナデ、	黒褐色	胴部 60%
			下半は寛削りの後粗いナデ、内面ナデ。底部外面：	焼成 良好	底部 50%
			寛削りの後粗いナデ、内面ナデ。砂粒を多く含む。		
17	埴	口径 (8.7)	口縁部は直線的に開き、端部に弱い面をもつ。口縁	A～E	口縁部 30%
		胴径 10.8	部両面：横ナデ。胴部外面：上半に刷毛目調整、下	灰褐色	胴部 80%
		底径 3.2	半に寛削り、後全体をナデ、内面：ナデ。底部両面	焼成 良好	底部 100%
17	埴	器高 8.0	：寛削り。小礫を含む。		
		胴径 (5.8)	器面は荒れている。胴部外面：横位の寛磨きか、内	A～D	体部 65%

番号	器 種	大 き さ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
18	器 台	底部 1.4	面：ナデか。底部外面：ナデ、内面ナデか。砂粒は	褐色	坏部 95 % 脚台部位 100 %
		現存高 3.2	少量である。	焼成 普通	
		口径 7.5	口縁部は内彎しながら開く。裾部に3孔を有すと思	A～D	
		現存高 4.4	われる。器面は非常に荒れている。全面とも整形不明。	赤褐色 焼成 普通	
19	器 台	口径 9.4	口径部は窄まりながら短かく立ち上がる。器面は非	A～E	坏部 95 % 脚台部位 100 %
		現存高 4.5	常に荒れている。坏部外面：横位の寛磨きか、内面	赤褐色	
			：ナデか。脚台部外面に縦位の寛磨きか、内面：ナ	焼成 普通	
			デか。脚台部には3孔を有すと思われる。坏部両面		
20	器 台	口径 9.0	口縁部は内彎しながら開く。裾部に3孔をもつ。器	A～E	坏部 65 % 脚台部 55 %
		底部 11.5	面は荒れている。坏部両面：ナデか。脚台部外面：	褐色	
		器高 7.9	縦位の寛磨き、内面ナデ、後下位両面を横ナデ。胎	焼成 良好	
			土は比較的細密である。		
21	高 坏	現存高 7.7	器面は荒れている。坏下部外面：ナデか、内面：ナ	A～D	柱状部 85 %
			デ。柱状部外面：ナデ、内面：寛削りの後ナデ。裾	褐色	
			部：横ナデか。	焼成 普通	
22	高 坏	底部 (11.1)	裾部は直線気味に開く。整形は丁寧。柱状部外面：	A～D	柱状部 95 % 裾部 25 %
		現存高 8.8	縦位の寛磨きの後横位のナデ、内面：指頭による押	茶褐色	
			えの後ナデ。裾部外面：横ナデ、内面：横位の刷毛	焼成 良好	
			目調整の後横ナデ。砂粒少。		
23	瓶	口径 23.1	内面中央よりやや下位は、使用の際中敷との接触の	A～D	体部 80 % 底部 10 %
		底径 (6.6)	ためか整形が摩耗している。体部外面：上半は刷毛	褐色	
		器高 10.8	目調整の後上位を横ナデ、中位をナデ、下半は横位	焼成 普通	
			の寛削り。内面：横位の刷毛目調整の後ナデ。底部		
24	S 字鉢	口径 (16.5)	口縁下段は直線気味に大きく開き、上段も直線気味	A～D	口縁部 25 % 坏部上半 20 %
		現存高 3.9	に開くが薄く端部は尖る。口縁部・坏部上半：両面	茶褐色	
			共に横位の丁寧な寛磨き。胎土は細密である。	焼成 良好	
25	甕	口径 (19.7)	口縁部は反外気味に開く。器面は荒れている。口縁	A～D	口縁部 20 % 胴部上半 40 %
		胴径 (22.5)	部両面：横ナデ。胴部外面：横位の刷毛目調整、内	茶褐色	
		現存 21.0	面ナデ。Aを多く含む。胴部外面に黒斑。	焼成 普通	
26	台付甕	底径 9.2	器面は荒れている。底部内面：寛削りの後ナデか。	A～E	脚台部 65 %
		現存高 5.6	脚台部外面：ナデか、内面：下半はナデの後上半を	褐色	
			指頭による押え。外面に黒斑。	焼成 普通	

番号	器 種	大きさ (cm)	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
27	台付甕	底径 9.4 現存高 7.4	底部内面：粗い寛削り。脚台部外面：縦位の粗い寛削りの後粗いナデ、内面：横位の寛削りの後ナデ。脚台部外面に黒斑。	A～E 橙褐色 焼成 普通	脚台部 100 %
28	台付甕	口径 (15.3) 胴径 (22.0) 底径 9.7 器高 31.5	口縁部は外反して短かく開く。器面は荒れている。口縁部両面：横ナデ。胴部外面：縦位の寛削りの後粗い寛ナデか、両面：ナデ。脚台部両面：ナデか。胎土はAを多く含む。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 15 % 胴部上位 45 % 胴部下位 30 % 脚台部 65 %
29	S字甕	口径 13.7 現存高 3.4	口縁部は上下段共に外反し、稜は明瞭である。口縁部：横ナデ。胴部上位外面：斜位の刷毛目調整、内面：指ナデ様の押し。	A～E 橙褐色 焼成 普通	口縁部 35 %
30	S字甕	口径 (15.9) 現存高 4.1	口縁部の稜は比較的明瞭である。口縁部内面に面をもつ。器面は荒れている。口縁部：横ナデか。胴部外面：斜位の刷毛目調整、内面：指ナデ様の押し。	A～E 褐色 焼成 普通	口縁部 25 %
31	S字甕	口径 14.8 胴径 24.0 現存高 6.4	口縁部はやや厚手で屈曲は弱い。器面は荒れている。口縁部：両面を指頭で押え僅かな屈曲を作り出している。胴部外面：上位は右から左下へ、中位は左から右下への刷毛目調整、内面：ナデ。	A～E 橙褐色 焼成 普通	口縁部 95 % 胴部上半 70 %
32	S字甕	底径 7.8 現存高 5.2	端部内面に折り返しをもつ。接合部に砂粒を多く含む粘土を貼付。器面は荒れている。底部内面：指頭による押えの後ナデ。胴下部外面：縦位の寛削り。脚台部外面：刷毛目調整の後ナデか、内面：上半は寛削り、下半はナデ。脚台部外面に黒斑。	A～D 褐色 焼成 普通	脚台部 90 %
33	S字甕	現存高 4.7	器面は荒れている。脚台部外面：刷毛目調整を鋸歯状に残す、内面：接合部に砂粒を多く含む粘土を貼付した後指ナデ様の押し。B・Eを多く含む。	A～E 褐色 焼成 普通	脚台部上半 100 %
34	S字甕	底径 (9.8) 現存高 3.0	端部内面は折り返しである。器面は非常に荒れている。脚台部外面：ナデか、両面：端部折り返しの後指頭による押し。	A～E 茶褐色 焼成 普通	脚台部下半 35 %
35	S字甕	底径 8.2 現存高 6.5	端部内面は折り返しである。器面は荒れている。底部内面：寛削りか。脚台部外面：刷毛目調整を鋸歯状に残す。内面：端部折り返しの後指頭による押し。	A～E 橙褐色 焼成 普通	脚台部 45 %
36	S字甕	底径 8.4 現存高 5.8	端部内面は折り返しである。器面は荒れている。脚台部外面：刷毛目調整を鋸歯状に残す。内面：端部折り返しの後指頭による押し。接合部内面は砂粒を多く含む粘土を貼付した後指ナデ様の押し。	A～E 褐色 焼成 普通	脚台部 95 % B・Eを多く含む。
37	甕	底径 4.0 現存高 2.8	器面は荒れている。胴部外面：粗い刷毛目調整、内面：ナデ。底部外面：ナデ、内面：刷毛目調整。	A～F 黒褐色 焼成 普通	胴部下位 60 % 底部 100 %